

学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学 2016 春

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。当期の分析においては、Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力、Q14 平均学習時間から履修者の「学習の質」を類型化し、それぞれでの改善方針を探り直しました。また、過年度からの推移も把握のため、必要に応じて比較データを掲載しています。

目次

1. 全体概況	3
■授業ごとに実現されている「学習の質・量」に関する考察	6
2. 項目別集計結果	10
参考資料 1 実施率／回収率	25
1-1 アンケート実施率（回収率）科目区分別	26
1-2 アンケート実施率（学部） 2005 年度春学期～2012 年度秋学期	27
参考資料 2 自由記述回答 頻出キーワード分析	29
<集計グラフ>	
自由記述回答 頻出キーワード分析について	30
全学	31
学部別	32
回答人数帯別	33
学年別	34
出現率前回比較 全学	35
出現率前回比較 学部別	36
出現率前回比較 回答人数帯別	40
出現率前回比較 学年別	43

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差¹は下表に示す通りです。
無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

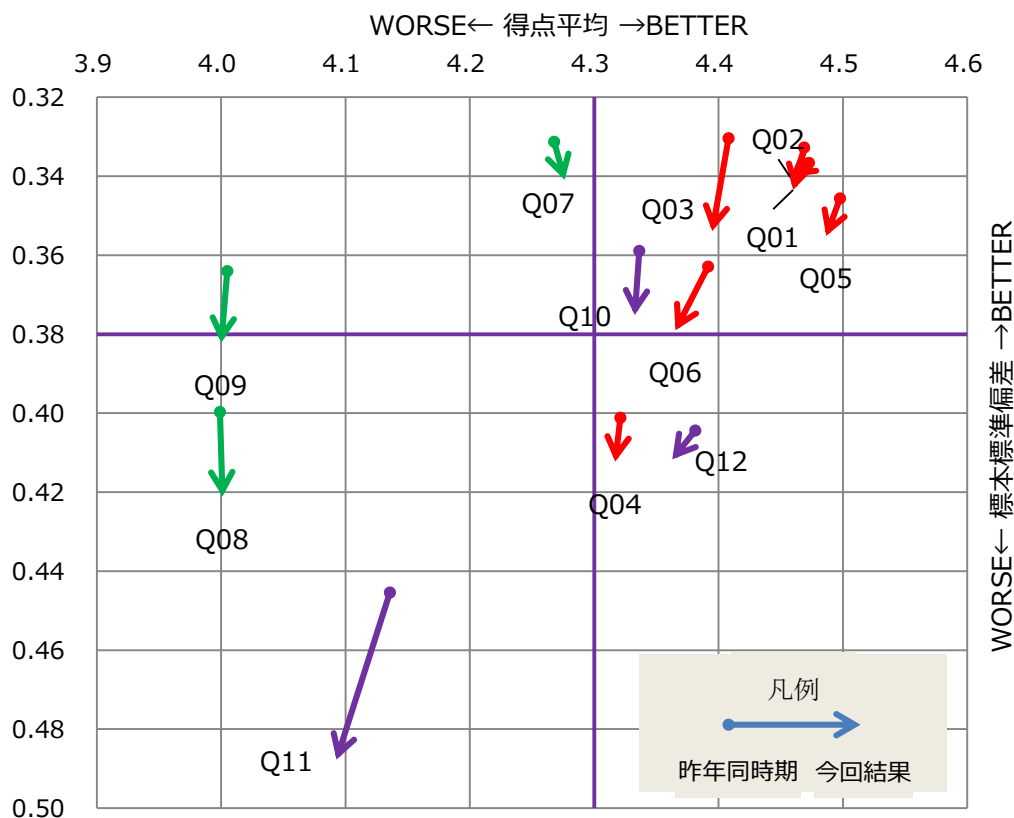
「5 そう思う」…5点、 「4 どちらかと言えばそう思う」…4点 「3 どちらともいえない」…3点
「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点 「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容	平均					標準偏差					
		年	16	15	14	13	12	16	15	14	13	12
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.46	4.47	4.47	4.49	4.45	0.34	0.33	0.34	0.29	0.34
		秋		4.48	4.51	4.52	4.50		0.35	0.32	0.31	0.32
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.46	4.47	4.47	4.49	4.45	0.34	0.34	0.34	0.30	0.33
		秋		4.48	4.51	4.52	4.50		0.35	0.31	0.31	0.30
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.40	4.41	4.39	4.41	4.37	0.35	0.33	0.33	0.31	0.32
		秋		4.41	4.44	4.45	4.41		0.34	0.32	0.31	0.32
Q4	教員は、この授業の課題、準備・復習をするよう具体的に指示した	春	4.32	4.32	4.33	—	—	0.41	0.40	0.40	—	—
		秋		4.35	4.36	—	—		0.40	0.39	—	—
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.49	4.50	4.50	4.53	4.50	0.36	0.35	0.35	0.31	0.34
		秋		4.51	4.54	4.56	4.54		0.36	0.33	0.32	0.32
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.37	4.39	4.37	4.39	4.35	0.38	0.36	0.38	0.34	0.36
		秋		4.39	4.42	4.44	4.40		0.38	0.35	0.34	0.35
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.28	4.27	4.26	4.27	4.22	0.34	0.33	0.35	0.33	0.32
		秋		4.28	4.30	4.29	4.25		0.35	0.32	0.33	0.33
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.00	4.00	3.99	3.99	3.94	0.42	0.40	0.41	0.41	0.40
		秋		4.06	4.07	4.07	3.99		0.42	0.40	0.41	0.40
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた(できる)	春	4.00	4.00	3.97	3.99	3.93	0.38	0.36	0.37	0.37	0.37
		秋		4.03	4.06	4.05	3.98		0.38	0.36	0.38	0.37
Q10	私がこの授業で得たものは、今後の学習活動や人生に生きる	春	4.33	4.34	4.31	4.34	4.30	0.38	0.36	0.38	0.35	0.38
		秋		4.36	4.37	4.39	4.36		0.37	0.35	0.35	0.35
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.09	4.14	4.10	4.16	4.11	0.49	0.45	0.48	0.42	0.44
		秋		4.15	4.17	4.24	4.19		0.45	0.43	0.42	0.41
Q12	全体として、この授業を受けてよかった	春	4.36	4.38	4.36	4.41	4.38	0.41	0.40	0.43	0.36	0.38
		秋		4.39	4.42	4.46	4.45		0.41	0.38	0.37	0.36
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.52	4.56	4.59	4.59	4.57	0.28	0.25	0.26	0.25	0.26
		秋		4.49	4.51	4.51	4.50		0.29	0.28	0.26	0.25
Q14	この授業のための課題、準備・復習に何時間取り組みましたか	春	2.88	2.78	2.85	—	—	0.61	0.65	0.65	—	—
		秋		2.83	2.91	—	—		0.68	0.67	—	—
全質問合計 (Q13、Q14 を除く)		春	4.30	4.31	4.29	4.32	4.27	0.33	0.32	0.33	0.30	0.32
		秋		4.33	4.35	4.36	4.32		0.34	0.31	0.31	0.30

¹ 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。なお、2013 年度以前は質問設計が異なりますので、全質問合計は参考値としてご覧いただければ幸いです。

下の散布図は、前表に示した集計結果を視覚的に捉えていただくために、横軸に得点平均を縦軸に標準偏差を取って作成したものです。図中の矢印の始点が昨年同時期（2015 春）を、終点が今回の統計量を表しています。全項目について得点平均の変化は小さいものの授業間差異を表す標準偏差の拡大が見られます。特に Q11 興味関心の向上でその動きが顕著です。

注) Q13、Q14 の 2 項目は、選択肢の構造が他の 12 項目と異なるため、別に扱うことにいたします。



下表は、昨年同時期と比較した場合に母平均に差があるかどうかを検定した結果をもとに、統計的に意味のある差が検出されたものだけを表示したものです。上述の Q11 興味関心の向上は標準偏差が拡大しただけでなく、平均にも低下が見られたということになります。

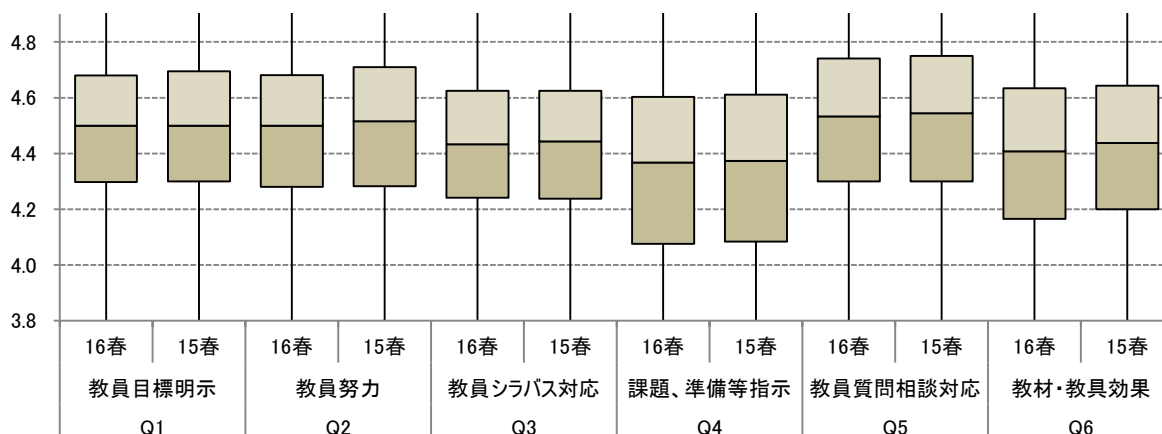
Q13 出席率も同様に、僅かながら低下が見られますが、一方、Q14 平均学習時間では改善が図られています。しかしながら、Q14 平均学習時間の平均は、「31 分以上 60 分未満」に相当する 3.0 に未だ届かないところにあり、十分な学習時間が投じられているとは言えません。

変数	Q11 興味関心の向上		Q13 出席率		Q14 平均学習時間	
	2016 春	2015 春	2016 春	2015 春	2016 春	2015 春
サンプルサイズ	1,123	1,050	1,123	1,050	1,123	1,050
平均値	4.093	4.136	4.524	4.559	2.884	2.778
標準偏差	0.488	0.446	0.279	0.255	0.611	0.654
t 検定	0.032 *		0.0021 **		p < 0.001 **	

* : P<0.05 ** : P<0.01

「教員による授業への取り組み」(Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6) ● (矢印：赤)

これまでに積み上げられてきた改善成果により、比較的高い評価を得ており昨年度とほぼ変わらない水準を維持しています。下の四分位図を見ると、Q6 教材・教具工夫で僅かながら箱の下端（下位 1/4）の位置が下がっています。また、Q4 課題、準備・復習指示は箱の長さが最も大きく、授業間での差異が解消されていない様子が見て取れます。

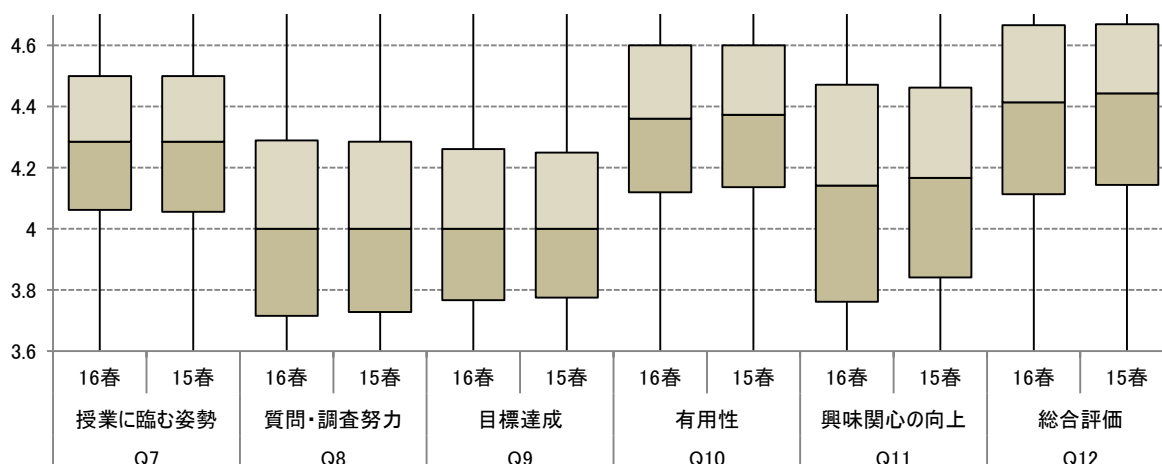


「学生による取り組みと成果」(Q7、Q8、Q9) ● (矢印：緑)

Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力を比べると、「真剣に取り組んでいる」との自己認識とは裏腹に不明点があっても必ずしも解消に向けた行動に繋がっていない様子が浮かび上がります。具体的な学習方法を学ばせ、意識と行動の一致を図る必要があります。

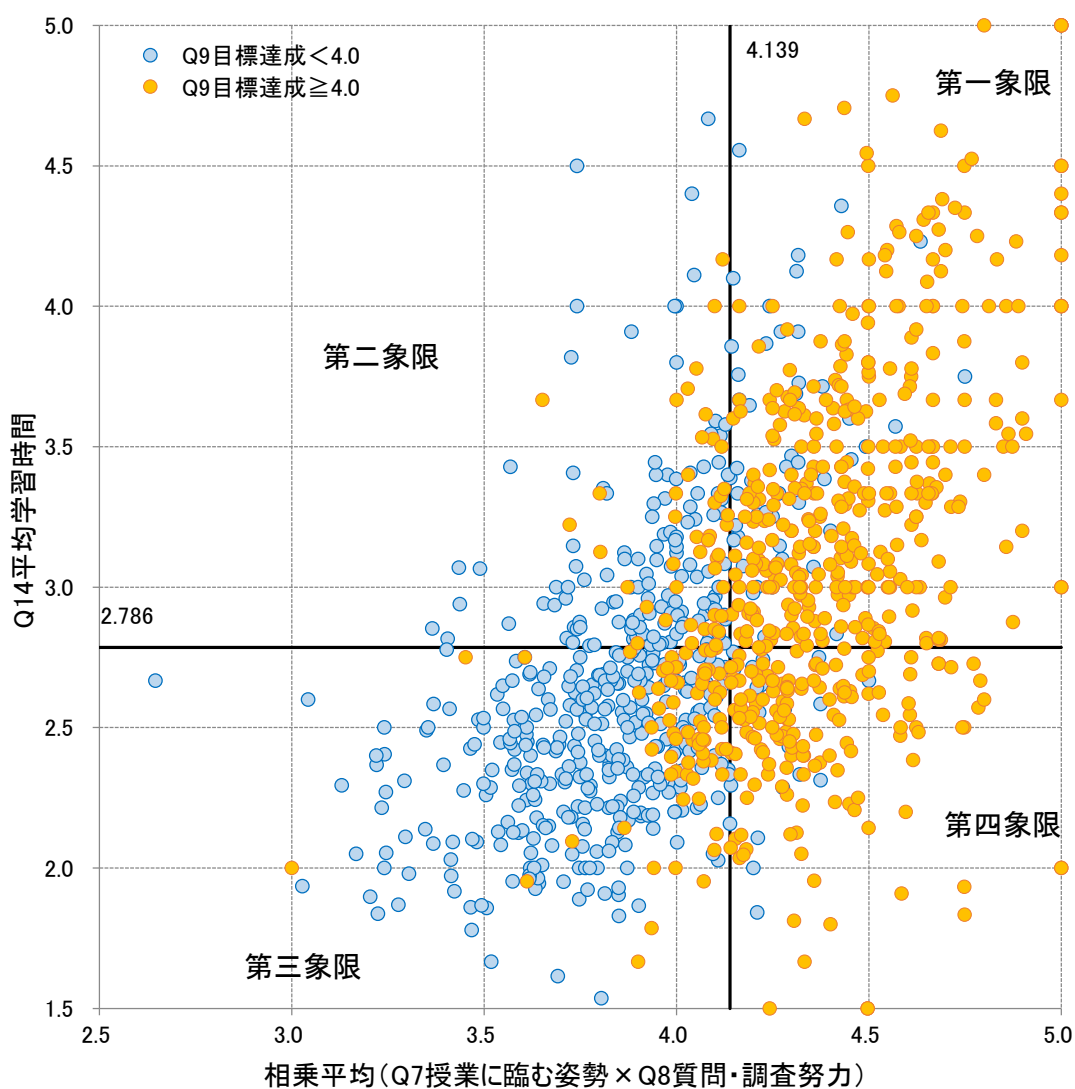
「授業に対する満足度（学びの成果）」(Q10、Q11、Q12) ● (矢印：紫)

Q11 興味関心の向上では、箱の下端が目に見えて下がっています。有用性と比べると評価分布に大きな隔たりがあります。学問探究の面白さを見出させるのは容易ではありませんが、4.5 ポイントを超える優良実践もあり、やり方次第という部分もあるかと存じます。科目区分や対象学年に応じた好適な手法を学び合う機会を整える必要があると考えます。



■授業ごとに実現されている「学習の質・量」に関する考察

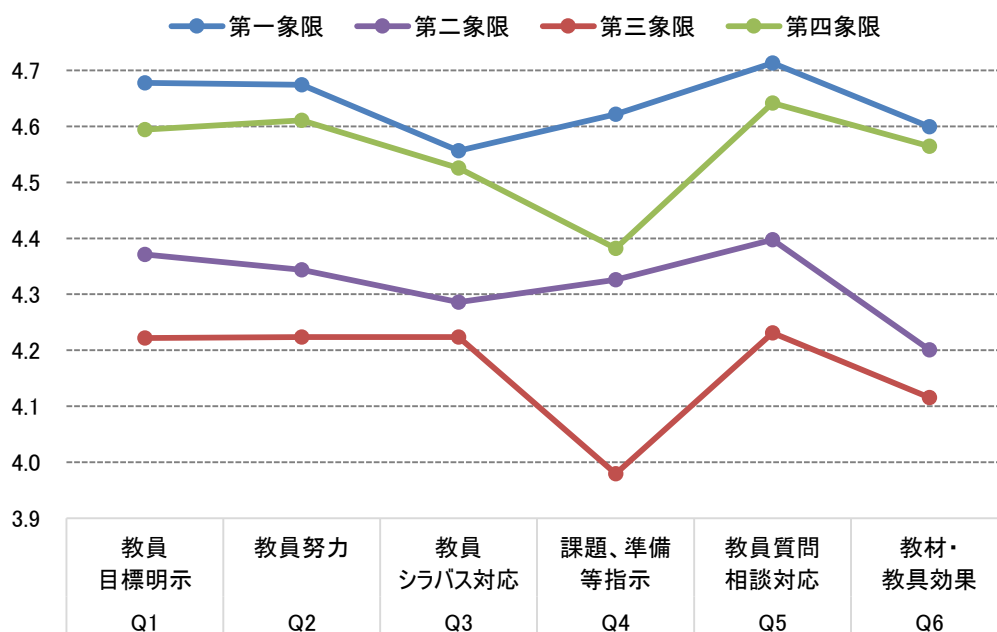
今回から、「授業評価アンケート 科目別結果」(個人票)に下図が表示され、ご担当されている授業の位置を確認できるようになりました。グラフは、横軸に{Q7 授業に臨む姿勢×Q8 質問・調査努力}の相乗平均を、縦軸にQ14 平均学習時間を取って作成したものです。オレンジ色の●は、Q9 目標達成で4.0以上の授業(=当該授業を履修する学生の回答が平均で「どちらかと言えばそう思う」以上に達している授業)、青色の●は、Q9 目標達成が4.0未満の授業を表しています。座表面内に引いた太線は、縦軸・横軸に配置した数値それぞれの中央値を表しています。以下の分析では太線で分けた4つのエリアを象限に見立て、それぞれ「第一象限」～「第四象限」と呼ぶことにいたします。



散布図を見ての通り、オレンジ●と青●の分布は左右方向で顕著に分かれており、上下方向には分布の境界がはっきりしません。Q9 目標達成の成否を分けるのは、授業外学習時間ではなく、Q7 授業に臨む姿勢×Q8 質問・調査努力であると言えそうです。改善のために考え得る対応策は、象限ごとに異なります。授業改善に以下の記事が少しでもお役に立てば幸いです。

教員側で直接的にコントロールできる項目 (Q1~Q6) における象限別の平均値は下グラフに示す通りです。第一象限と第二象限、第三象限と第四象限は、Q1 から Q6 のすべてで大きく値が異なることから、教員側での取り組みの如何で、前掲の散布図中の左右方向の位置が決定している部分は小さくないと考えられます。

区分	件数	目標達成 Q9 \geq 4.0	目標達成 Q9 $<$ 4.0
第一象限	392	88%	12%
第二象限	170	26%	74%
第三象限	391	18%	82%
第四象限	170	87%	13%
合計	1,123	54%	46%



一方、第一象限と第四象限、第二象限と第三象限という上下方向 (学習時間) で授業を隔てている大きな要因は、Q4 課題、準備・復習指示です。具体的で達成可能な課題と明確な指示を与えることで、当該項目の改善を図れば、座標上の位置を上方向に動かすことは十分に可能と思われます。但し、先にも述べた通り、上方向に動かすだけで Q9 目標達成を高めるのは容易ではなく、Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力を直接的に改善する方策を併せ講じる必要があります。

【第一象限】に位置する場合：

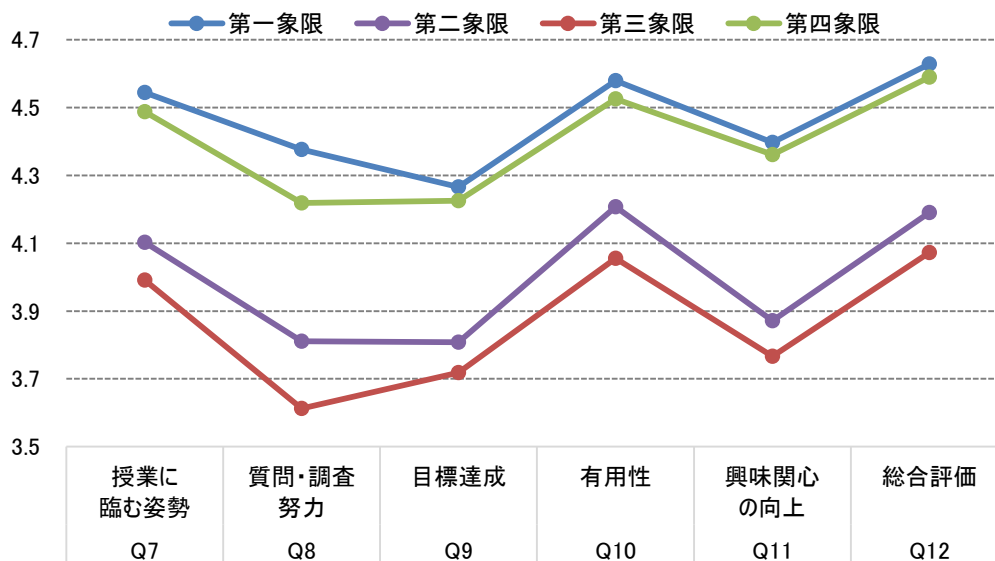
{Q7 授業に臨む姿勢 \times Q8 質問・調査努力} の相乗平均 \geq 4.14、Q14 平均学習時間 \geq 2.79

授業に臨む姿勢・質問調査努力、平均学習時間の双方で中央値以上の評価を得ている授業です。この象限内にありながら 12%の授業では Q9 目標達成が 4.0 に達しませんでした。該当する授業では、目標設定 (難しすぎる) か授業の進め方 (わかりにくい) のいずれかに改善課題を求めるとの妥当と思われます。Q6 教材・教具で科目区分平均 (個票「科目別結果」に表示) を下回っているようなら、後者の可能性が先に疑われます。それ以外のケースでは、設定された目標が高すぎる可能性が考えられますが、目標を切り下げるのは最後の手段です。履修期間の序盤でレディネスを整えたり、学生同士の教え合いなど集団知を活用して課題の達成可能性を高めたり、課題を段階的に分解するスモールステップ化を試してみたりすることが先決であるとお考え下さい。

【第二象限】に位置する場合：

{Q7 授業に臨む姿勢×Q8 質問・調査努力} の相乗平均<4.14、Q14 平均学習時間≥2.79

相対的に長い平均学習時間が確保できていますが、授業に臨む姿勢と質問・調査努力のいずれか（または双方）に改善すべき課題があります。第一象限にある授業と第二象限にある授業を分けているのは前述の Q1～Q6 だけではありません。下表に示す通り、第一／第四象限の平均と、第二／第三象限の平均の違いが最大となるのは Q11 興味関心の向上で、その差は 0.56 に達します。



興味関心は工夫して努力した結果、達成した中に生まれるのは、前回の報告書でお伝えした通りですが、興味を持つことと努力することが鶏と卵になっては堂々巡りです。教える側が働きかけられるのは、達成可能性を担保された具体的な課題を与えることで引き出し得る「努力すること」に限られ、その結果としての興味関心の発現を待つしかないと思われます。

第一／第四象限と第二／第三象限の差		
Q1	教員目標明示	0.34
Q2	教員努力	0.36
Q3	教員シラバス対応	0.29
Q4	課題、準備等指示	0.35
Q5	教員質問相談対応	0.36
Q6	教材・教具効果	0.42
Q7	授業に臨む姿勢	0.47
Q8	質問・調査努力	0.59
Q9	目標達成	0.48
Q10	有用性	0.42
Q11	興味関心の向上	0.56
Q12	総合評価	0.48

学生が主体的・意欲的に学習に取り組むのは、「学ぶことへの自分の理由」を持ったときです。将来の夢があって、その実現を図りたいという気持ちも理由の一つでしょうが、そうした「外」にあるものとは異なる「興味という形で内から生まれる学びへの欲求」こそが、大切にすべきものと考えます。次の授業に向けて、論点についてのプレディスカッションを行ったり、ターゲットとなる問いに仮の答えを作らせてみたりすると、様々な疑問や問題意識を学生は抱くことになり、それらを解消したいとの欲求が学びへのモチベーションになるのではないのでしょうか。前回は申し上げた通り、「明確な目標提示」「適切な手引きによる達成可能性」「達成したことのたな卸し／アウトプット」の3つを揃えることに引き続き取り組んでいただければ幸いです。

【第三象限】に位置する場合：

{Q7 授業に臨む姿勢×Q8 質問・調査努力} の相乗平均 <4.14 、Q14 平均学習時間 <2.79

平均学習時間を延ばす方向での改善を図るだけでは、第二象限に移行するだけです。結果的にQ9 目標達成を向上させずに終わる可能性があります。改善の方向性としては、学生に学ぶ理由を持たせることで第四象限に向かう方が好適です。具体的な方法は第二象限の場合と同じです。

【第四象限】に位置する場合：

{Q7 授業に臨む姿勢×Q8 質問・調査努力} の相乗平均 ≥ 4.14 、Q14 平均学習時間 <2.79

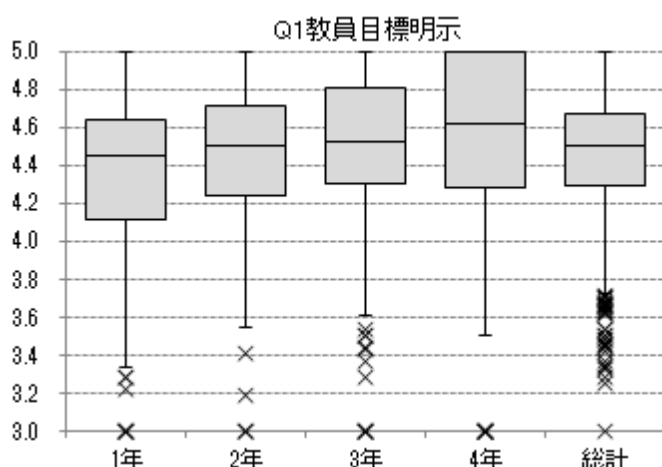
第一象限の授業との違いは、前述の通り、Q4 課題、予習・復習指示によるものと考えられます。具体的な課題が用意されていないことには、内在する不明点も具体化できず、Q8 質問・調査努力も促されず授業外学習に対する動機が得られません。但し、課題を与えただけでは、学生一人ひとりに「課題の達成可能性」が担保されません。手に負えないと思えば、自力で解決する方法を考える前に諦めてしまう学生が出てきてしまうのも半ば当然です。

教室を出る前に「仮の答え」を作っておき、不明点を明らかにしたうえで、学生同士の相談や解決に向けた方針を相互に伝え合わせる場面を設ければ、ヒントや手掛かりを得ることで、達成可能性を大きく高めることもできそうです。何をすれば良いかもわからない状態と、答えはわからないけど、どうすれば良いかの見込みが立った状態とでは取り組みに大きな違いが出ます。

なお、この象限に位置する授業では、Q4 課題、準備・復習指示の平均が 4.0 を下回っており、多くの場合は、具体的な課題が与えられていないことに解決すべき事柄がある可能性が高いと思われませんが、中にはQ4 で全授業平均に近い評価を得ながら第四象限に止まっている授業も散見されます。このケースでは、課題を増やすだけの対策では妥当性に欠ける部分がありそうです。学生側では既に学ぶ意欲は十分に刺激されていますので、必須の課題をいたずらに増やしても効果は薄いのではないかと思われます。もともと頑張っていた学生は負荷超過になり、仮にやっていた学生は依然として取り組みが不十分なままという事態が予想され、結果として課題・準備・復習の履行率を下げてしまい、意図通りに授業を展開できない事態を招きかねません。任意課題や参考図書を提示することで、授業の到達目標を高意欲群向けとその他の学生向けに「複線的」に設けることもご検討ください。

■項目別集計結果分析

Q1 教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



相関係数	Q1
Q1教員目標明示	
Q2教員努力	.777
Q3教員シラバス対応	.676
Q4課題、準備・復習指示	.604
Q5教員質問相談対応	.646
Q6教材・教具効果	.599
Q7授業に臨む姿勢	.531
Q8質問・調査努力	.438
Q9目標達成	.489
Q10有用性	.549
Q11興味関心の向上	.501
Q12総合評価	.592
Q13出席率	.166
Q14平均学習時間	.203

昨年同時期とはほとんど差がなく、ほぼ安定した評価を得ています。上図にみる通り、学年が上がるにつれて評価が高まります。学習を進める中、教員の意図を先回りして理解する能力も高まることもあろうかと思えます。他方、学習や研究に取り組む素地が整っていない1年生、2年生には、そうした補完が機能しないことを想定して、従来の方法を変えていく必要があります。

右のクロス集計表でご確認いただける通り、Q4 課題、準備・復習指示で「そう思う」を選んだ学生の大半（98.2%）がQ1 教員目標明示でも肯定的に回答しています。学生は「解くべき課題を通じて、到達目標を認識する」ようです。

	Q1=5	4	3	2	1
Q4=5	85.2%	13.0%	1.6%	0.2%	0.1%
4	29.8%	61.9%	7.1%	0.8%	0.3%
3	19.4%	44.8%	33.1%	2.1%	0.6%
2	12.9%	38.7%	27.3%	18.0%	3.1%
1	16.1%	23.9%	16.5%	13.0%	30.5%

1年生、2年生の授業では、どうしても概説的な内容が多くなります。「課題に挑ませるには基礎的な知識・理解が備わらない」という懸念から、知識の伝達と体系的理解の形成を優先するケースが多くなるものと拝察します。しかしながら、理解の軸ができてない段階で付与した知識は断片化が進みやすい傾向にあり、学生の側では「今学んでいること」がどういう意味を持つのか、何を目指しているのかも捉えにくくなります。先生方は自らの経験や知識に基づき先を見越した指導設計をなさいますが、学生はその前提となる経験・知識を欠いているという点を踏まえる必要があると考えます。

導入フェイズにおいて課題に取り組みせれば、その段階で「何を学ぼうとしているか」を直観的に学生は捉えられます。この工程を挟み込んでから、到達目標を学生に言語化させたり、先生から再提示したりするのは如何でしょうか。また答えを作る中で一定の理解が形成された後ならそれを軸に知識の体系化を図ることも、知識拡充を目的とした課題に取り組みせることも容易になります。目標提示においても学生側のレディネスを整えるという発想が必要かと思われます。

Q2 教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ

Q7 授業に臨む姿勢との間で 0.559 と比較的高い相関があり、この項目で科目区分平均を下回っている場合、それが学生の意欲に少なからぬ影響を及ぼしている可能性が考えられます。

下表は Q2 教員努力を目的変数、教員側でコントロール可能な 5 項目を説明変数において行った重回帰分析の結果です。Q1 教員目標明示が最も大きく寄与しており、それに続くのが Q5 「教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた」です。目標が何であるかを明確にしない限り、その達成に向けての教員意欲について肯定的な判断を躊躇うかもしれず、また、不明点や相談ごとに対して真摯な姿勢が見えなければ、教員の熱意を疑うのも半ば当然かもしれません。これら 2 項目での改善が先決と考えられます。

相関係数	Q2
Q1教員目標明示	.777
Q2教員努力	
Q3教員シラバス対応	.691
Q4課題、準備・復習指示	.613
Q5教員質問相談対応	.699
Q6教材・教具効果	.642
Q7授業に臨む姿勢	.559
Q8質問・調査努力	.454
Q9目標達成	.504
Q10有用性	.583
Q11興味関心の向上	.541
Q12総合評価	.636
Q13出席率	.179
Q14平均学習時間	.191

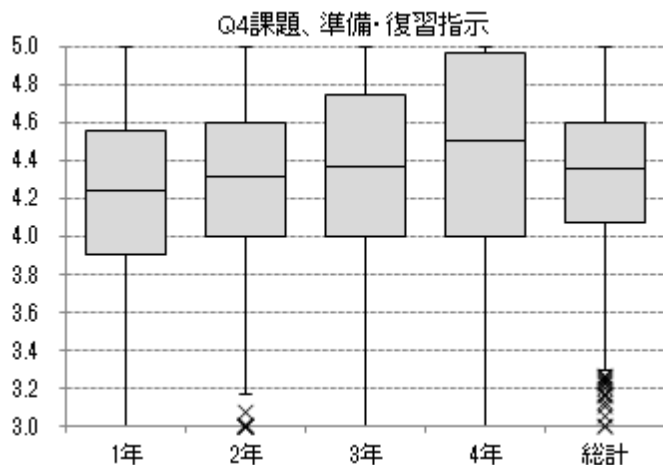
Q2 を目的変数とする重回帰分析		偏回帰係数の有意性の検定			*
変数	偏回帰係数	F 値	t 値	P 値	**
Q1 教員目標明示	0.4128	8375.7	91.5	p < 0.001	**
Q3 教員シラバス対応	0.1706	1545.6	39.3	p < 0.001	**
Q4 課題、準備・復習指示	0.0545	251.9	15.9	p < 0.001	**
Q5 教員質問相談対応	0.2012	2247.0	47.4	p < 0.001	**
Q6 教材・教具効果	0.1097	1107.2	33.3	p < 0.001	**
定数項	0.2475	288.4	17.0	p < 0.001	**

Q3 教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った

この項目も昨年同時期とほとんど変わらず、概ね良好な評価を維持しています。右表では、一見すると内容的にあまり関係がなさそうな Q5 「学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた」との間に 0.6 を超える相関が見られます。「学生に到達させたい目標状態が教員の側で明確にされていること」を背景要因として、それが Q1 教員目標明示、Q2 教員努力などに対するのと同じく、Q3 シラバス対応や Q5 質問相談対応等の教員行動にも現れていると考えるのが好適です。まずは、到達状態を評価規準としてご自身のうちで明確にしておくことが肝要であり、その上で、目標の達成に必要な学習活動を選択・配列していくという発想を持って授業デザイン／指導計画を練るという手順を徹底しましょう。また、学期ごとの反省を次期シラバスに著実に反映することで初めて、継続的に履行可能で実効の高いシラバスの実現が図られるはずで、授業を進める中で、お気づきになったことはその場でシラバスに書き込んでいきましょう。

相関係数	Q3
Q1教員目標明示	.676
Q2教員努力	.691
Q3教員シラバス対応	
Q4課題、準備・復習指示	.581
Q5教員質問相談対応	.618
Q6教材・教具効果	.588
Q7授業に臨む姿勢	.492
Q8質問・調査努力	.403
Q9目標達成	.460
Q10有用性	.508
Q11興味関心の向上	.471
Q12総合評価	.543
Q13出席率	.168
Q14平均学習時間	.162

Q4 教員は、この授業の課題、準備・復習をするよう具体的に指示した

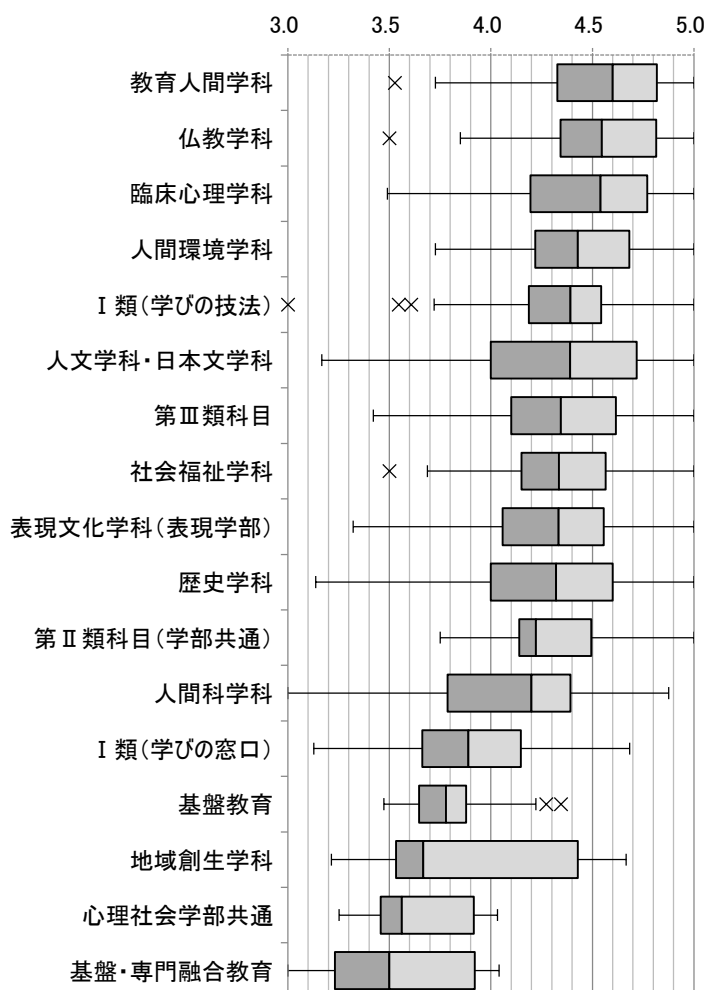


相関係数	Q3
Q1教員目標明示	.676
Q2教員努力	.691
Q3教員シラバス対応	
Q4課題、準備・復習指示	.581
Q5教員質問相談対応	.618
Q6教材・教具効果	.588
Q7授業に臨む姿勢	.492
Q8質問・調査努力	.403
Q9目標達成	.460
Q10有用性	.508
Q11興味関心の向上	.471
Q12総合評価	.543
Q13出席率	.168
Q14平均学習時間	.162

前掲 (p. 5) の四分位が示す通り、教員が直接コントロールできる項目の中では最も低い評価に留まり、且つ授業間の差異も大きめです。学年別にみると1年生が最も低く、学年が上がるにつれて評価が高まる傾向が見られます。学習・研究に不慣れな学生に対してこそよりの確で丁寧な指示が必要でありながら、実態は逆になっている様子です。

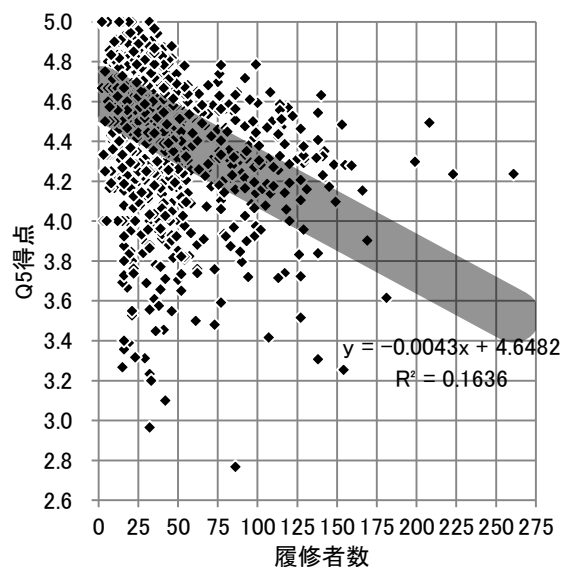
先生方は丁寧に課題や準備・復習内容を提示しているつもりでも、学生側で補完的理解が働かず、指示がうまく伝わらない／理解されていない可能性を疑うべきかもしれません。

与えられた課題に取り組むにも、授業の準備・復習をするにも、やり方への習熟には学年間で差があります。授業準備に相当する学習工程について幾度かは授業内で現地に行く場を作ることもご検討ください。その場の様子を観察してみると、教える側で自明と考えていたことが実際には学生の想像を超えたり手に余ったりすることもあります。取り組み方そのものに習熟させるにも、学生がそれぞれのタスクをどこまで創造的に理解できるのかを把握するにも有用です。



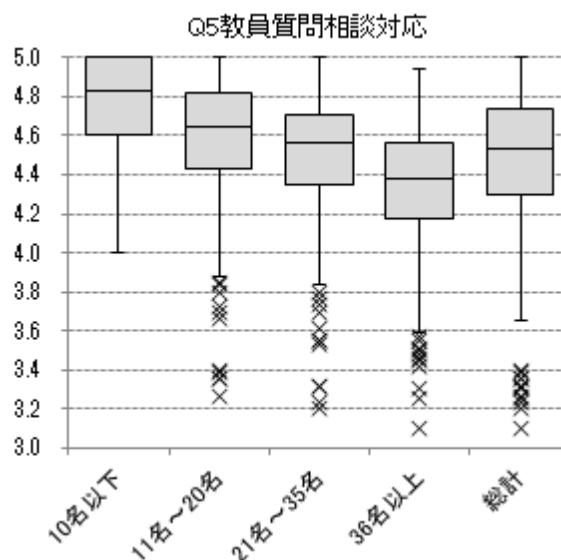
Q5 教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた

ここ5カ年は4.5前後の平均を保っており、教員努力に含まれるQ1～Q6の各項目中で最も高い評価を得ています。右図に示す通り、履修人数が多くなるほど評価は低くなるのは過年度のデータでも確認できていますが、近似線から離れたところにも厚い分布が見られます。20人以下の授業でも全体平均を下回るケースが少なくないばかりか、100名を超える大規模教室でも+4.5を超える優れた実践も見られます。履修者数だけが絶対的な決定要素ではないということです。



上記の質問に否定的に答えた場合でも、実際に質問について邪険に扱われたということではないはずです。むしろ、質問や相談をするチャンスがないまま勝手な思い込みを抱いている可能性の方が高そうです。

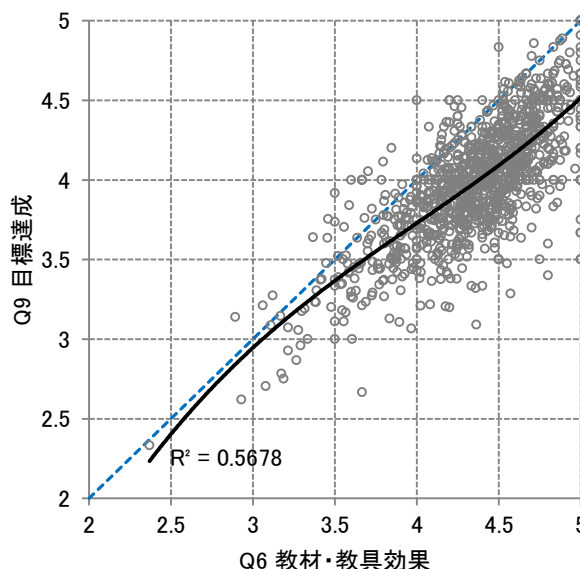
ひと通りの学習を終えた場面で学生に質問をさせれば、そこまでの学びを振り返らせることができます。しかしながら「質問はありませんか」という聞き方はほとんど効果を得ません。もともと積極的な学生は手を挙げたとしても、他の学生は押し黙ったままで終わります。



学生からの質問があれば受けるというのではなく、もっと積極的に「質問をさせる／質問を作らせる」という発想で、その手段を考えるのが得策です。生徒にとって、質問をするということは、疑問点や「その先を覗きたい箇所」を探すということです。当然ながら、ノートや教科書、プリントを見返すことで、見落としの確認や再記憶の機会を得ます。しかも、そこに書かれている事柄を単純に覚えるという意識ではなく、「疑問や興味を探しながら」という価値ある意識が加わります。こうした「訓練」を重ねていけば、受け取った情報をそのまま覚えて記憶すれば良いという間違った学習観を改める効果も期待できるのではないのでしょうか。少人数のグループで互いが疑問に感じたことを挙げさせて、相互に解消できるものは教え合いでカバーさせた上で、手に負えないものを「グループの疑問」として発表させると、クラスで共有すべき新たな課題に発展することもあり得ます。

Q6 教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった

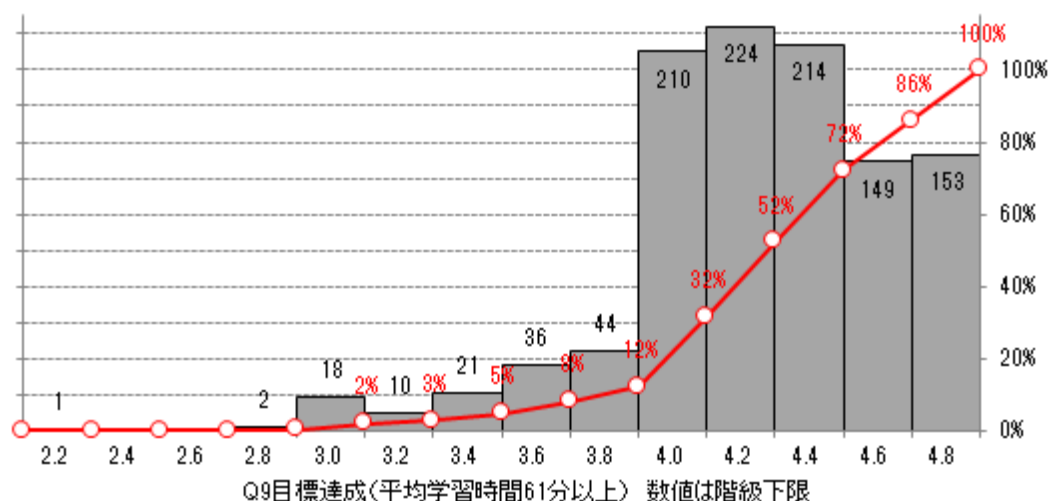
昨年同時期を僅かに下回る結果です。右図に示す通り、Q9 目標達成（授業の到達目標を達成できるか）での評価が Q6 教材・教具効果の評価を超えるケースは稀であり、近似線が Q9=4.0（「どちらかと言えばそう思う」に相当）を超えるのは、Q6 が 4.3 以上のときです。まずは、この得点に達するべく、教材を整え、教具の使い方を工夫するしかありません。



学生の自由意見記述は問題点の洗い出しに極めて有用です。プリントやスライドの文字が小さい、画像が不鮮明、マイクを適正に使用しない、プリントやスライドの参照があちらこちらに飛んで把握できなくなるといった批判は、毎回のように見られます。こうした基本的な部分をないがしろにしていなかったか点検が必要です。

学生の自由意見記述は問題点の洗い出しに極めて有用です。プリントやスライドの文字が小さい、画像が不鮮明、マイクを適正に使用しない、プリントやスライドの参照があちらこちらに飛んで把握できなくなるといった批判は、毎回のように見られます。こうした基本的な部分をないがしろにしていなかったか点検が必要です。

なお、右上図の近似線から下方に大きく離れた位置にある授業では、教材・教具工夫以外に、学習目標の達成を妨げている要素があると考えられます。学生側でのレディネスに比して、到達目標の設定が高すぎるという可能性もありますが、下のヒストグラムに示す通り、平均学習時間が 61 分以上の学生でも Q9 目標達成の平均が 4.0 に達しない授業は、全体の 12%に過ぎません。



近似線から下方に離れた授業の大半では、目標設定の高さとは別の理由（目標が明示されていない、課題や準備の指示が不十分、相談に応じる姿勢が見られないなど）があると思われます。まずは Q1～Q5 の各項目での評価得点と全学平均の差の大きさから優先課題を探って、その改善を図ることが先決とお考え下さい。目標水準の切り下げは切り札として切らずにおくべきです。

Q7 私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ

この項目との間にみられる相関が、Q8～12の各項目で特に高いのは右表に示す通りです。「真剣に取り組んだ結果として目標を達成し、有用性に気づき、興味関心がわく」という因果の連鎖に加え、「工夫して目標を達成した中に興味を見出し、真剣に取り組む姿勢が芽生えた」というストーリーも考えられます。

前者の展開では、起点が学生側の取り組みにあり、教える側では直接的なコントロールはできません。しかしながら、後者の展開ならば、工夫の方法を学ばせたり、具体的に達成可能なタスクを与え、協働などを通じて達成させたりする「働きかけ」ができるはずです。前者を先にイメージすると教える側の効力を発現できる範囲が狭まりますので、後者を強く意識して指導に臨むのが建設的であろうかと存じます。実際のところ、Q1 教員目標明示、Q2 教員努力、Q5 教員質問相談対応、Q6 教材・教具工夫は、この項目と 0.5 以上の相関を持ち、後者のストーリーを想定しないと高相関の説明が付きません。

下表は、Q7 授業に臨む姿勢の平均を科目区分×学年で算出したもの（サンプルサイズが 20 件未満のセルは非表示）です。値が特に低い区分についても、「学生のやる気がない」と決めてかかるのではなく、具体的な努力を引き出す働きかけに改善の余地があると捉えることで、改善の方策が見出せるのではないのでしょうか。

相関係数	Q7
Q1教員目標明示	.531
Q2教員努力	.559
Q3教員シラバス対応	.492
Q4課題、準備・復習指示	.487
Q5教員質問相談対応	.518
Q6教材・教具効果	.523
Q7授業に臨む姿勢	
Q8質問・調査努力	.672
Q9目標達成	.684
Q10有用性	.616
Q11興味関心の向上	.604
Q12総合評価	.623
Q13出席率	.292
Q14平均学習時間	.301

	1年	2年	3年	4年	総計
I 類（学びの窓口）	3.98	3.98	4.06	4.10	4.00
I 類（学びの技法）	4.20	4.11	4.22	4.15	4.17
基盤教育	3.89				3.89
基盤・専門融合教育	3.72				3.72
仏教学科	4.30	4.38	4.43	4.55	4.41
社会福祉学科	4.21	4.20	4.22	4.16	4.20
人間環境学科	4.38	4.17	4.25	4.43	4.29
臨床心理学科	4.28	4.11	4.36	4.39	4.25
人間科学科	4.15	4.02	4.09	3.67	4.04
心理社会学部共通	3.87				3.87
教育人間学科	4.43	4.32	4.30	4.45	4.35
人文学科・日本文学科	4.18	4.15	4.25	4.26	4.20
歴史学科	4.09	4.10	4.05	4.29	4.11
表現文化学科（表現学部）	4.27	4.23	4.29	4.29	4.26
地域創生学科	3.68				3.68
第Ⅱ類科目（学部共通）	4.40	4.69	4.42	4.19	4.43
第Ⅲ類科目	4.26	4.11	4.11	4.26	4.13
総計	4.13	4.13	4.22	4.28	4.17

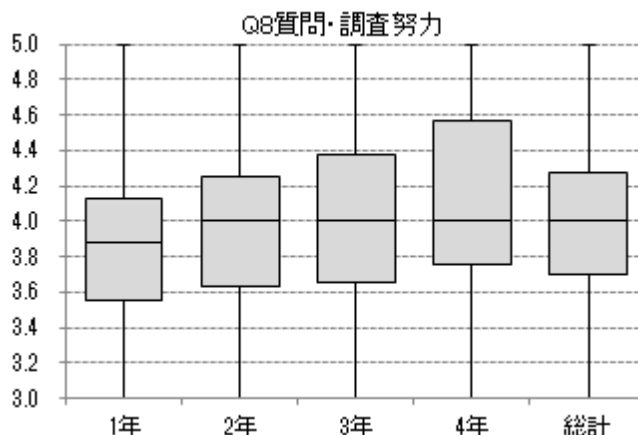
ご参考記事： 教室は、興味が生まれる瞬間を体験して学ばせる場
http://blog.kyouikujissen-ofcf.jp/201608/article_5.html

Q8 私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた

昨年同時期に比べ、分布の尾が下方に伸びています。Q7 授業に臨む姿勢と比較すると、平均値で 0.28 もの隔たりがあり、「真剣に取り組む」との文言からイメージすべきものを学生が誤って捉えている可能性も否定できませんが、指導改善という視点では、「疑問点に対してどのように取り組めば良いかを理解していない学生」の存在を想定すべきと思われます。

また、疑問点の解消に向かう前の段階として、疑問点を見つけれないというケースもあるかもしれません。理解したことを言語化するアウトプットがないとインプットの不備に気づけません。答えを導くべき課題を与え、自力で答えを作らせることで、表面的な理解に止まったり、あいまいさを残ったりすることを防ぎましょう。「解消すべき疑問」の所在に気づくことが、不明解消行動の起点です。

右図に示す通り、1年生は中央値で他学年に比べて低い水準にあり、2年生以降でしだいに箱の位置が高くなっていく様子が見てとれます。疑問解消の方法と姿勢を学生が徐々に獲得するのをただ待つより、獲得する場を設けて積極的に学ばせていく方がそれ以降の時期の学びもより意義の大きいものになるはずです。



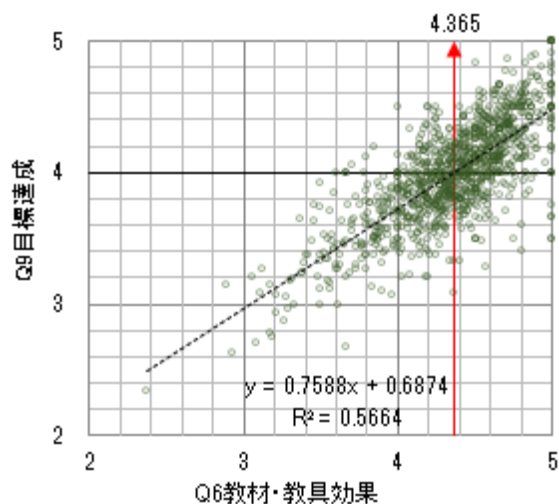
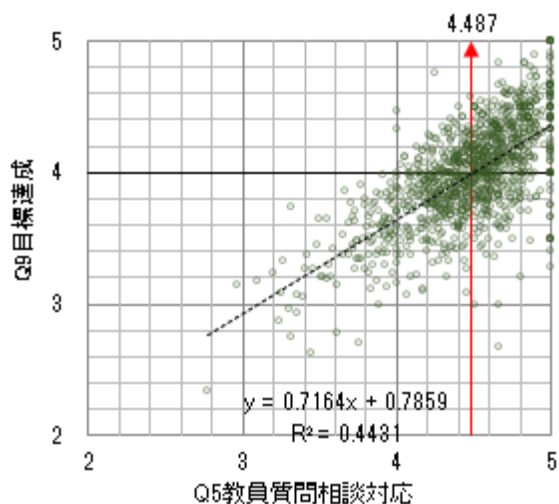
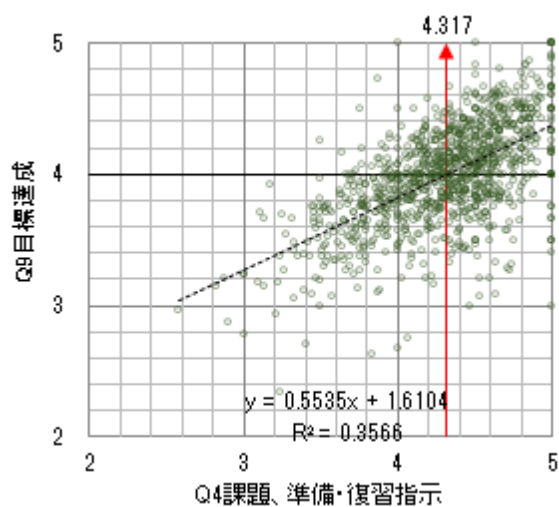
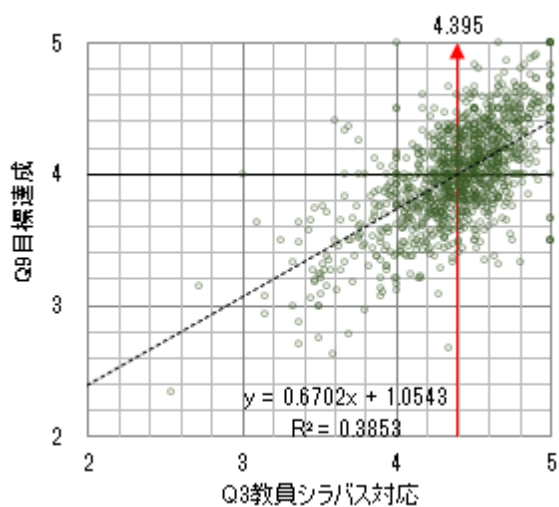
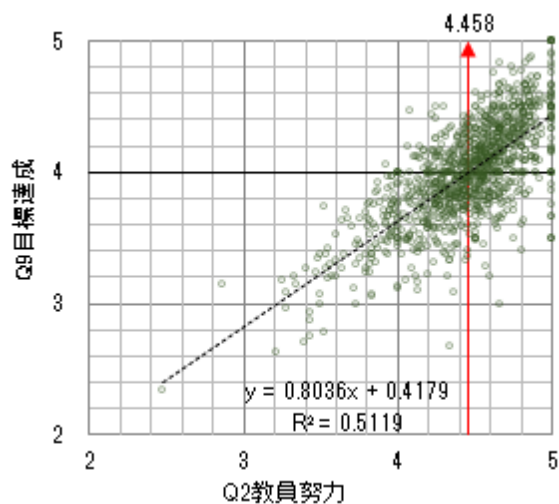
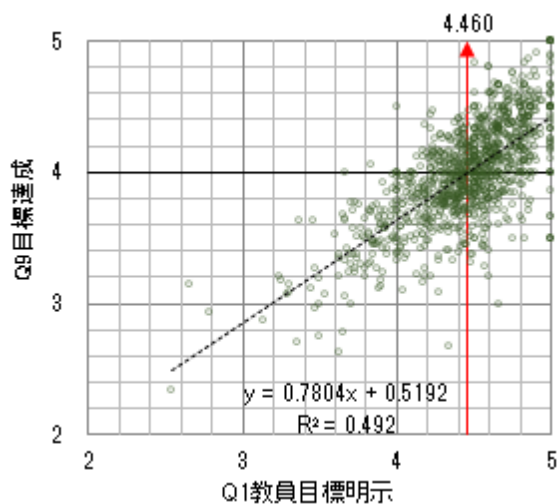
相関係数	Q8
Q1教員目標明示	.438
Q2教員努力	.454
Q3教員シラバス対応	.403
Q4課題・準備・復習指示	.494
Q5教員質問相談対応	.461
Q6教材・教具効果	.446
Q7授業に臨む姿勢	.672
Q8質問・調査努力	
Q9目標達成	.681
Q10有用性	.550
Q11興味関心の向上	.569
Q12総合評価	.526
Q13出席率	.189
Q14平均学習時間	.372

Q9 私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）

授業の到達目標を達成できるかどうかを分ける最大の要因は Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力にあることは前述の通りです。各項目の分析をご参考に改善を図っていただければ幸甚です。また、到達目標を達成できたことが、Q10 有用性や Q11 興味関心の向上につながっていくのは以前からお伝えしている通りであり、これら 2 項目が伸びてこない場合には、まずは、Q9 目標達成の向上・改善を図るべきです。学力や学欲に解消しがたい差が生じている場合、学生同士の教え合い・学び合い（協働的学習）の機会を増やすのも有効な改善策の一つです。

相関係数	Q9
Q1教員目標明示	.489
Q2教員努力	.504
Q3教員シラバス対応	.460
Q4課題・準備・復習指示	.458
Q5教員質問相談対応	.465
Q6教材・教具効果	.483
Q7授業に臨む姿勢	.684
Q8質問・調査努力	.681
Q9目標達成	
Q10有用性	.616
Q11興味関心の向上	.646
Q12総合評価	.593
Q13出席率	.227
Q14平均学習時間	.301

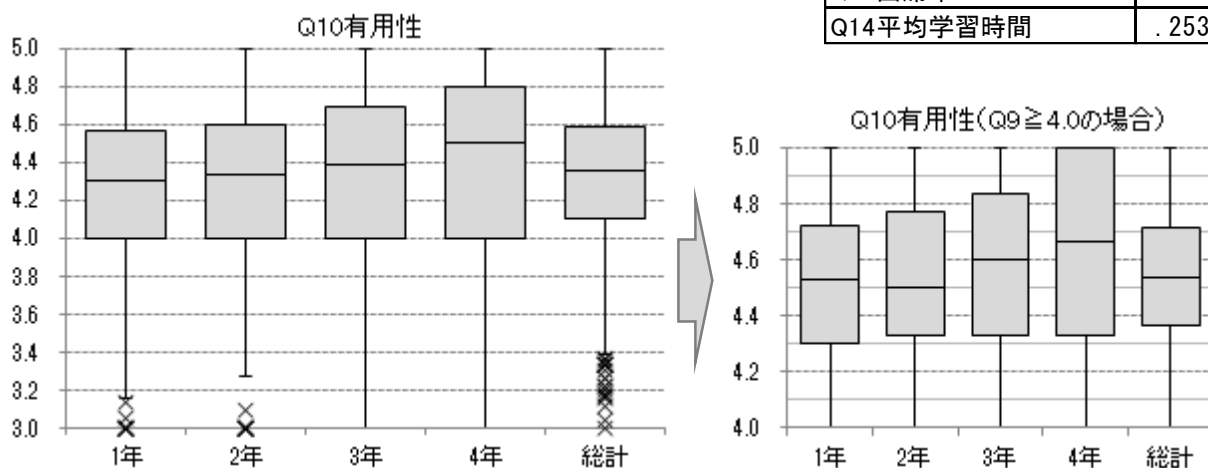
以下は、Q1～Q6 の各項目を横軸に、Q9 目標達成を縦軸に置いた散布図です。グラフ中に描き込んだ赤い線は、目標達成=4.0 と近似線が交わる位置を示しています。先端の矢印に添えた数値を授業の到達目標を達成させるために必要な目安としていただくとともに、担当される授業の位置をグラフ内に書き込んで近似線との位置関係をご確認下さい。近似線から下方に遠く離れている場合、その項目の効果を妨げる要因（ボトルネック）が他に存在しているはずですよ。



Q10 私がこの授業で得たものは、今後の学習活動や人生に活きる

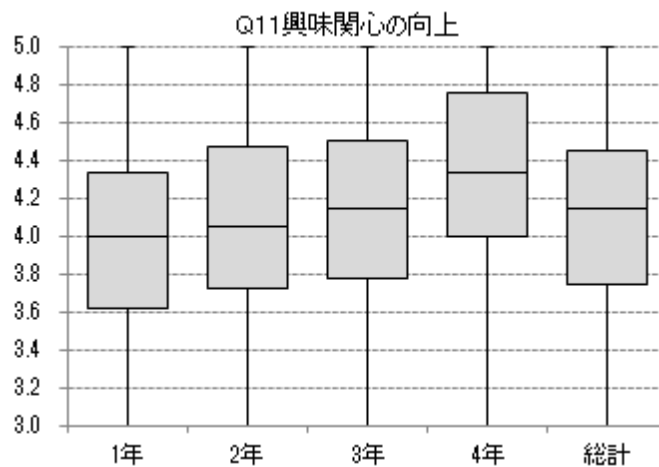
各学年において四分位図の箱の下端は 4.0 に達しており、良好な評価であると言えます。右表に示す通り、Q12 総合評価との相関係数は 0.745 と極めて高く、多くの学生にとっては「履修してよかった」と「今後の学習活動や人生に活きる」とをほぼ同義と考えている様子です。ただし、Q9 目標達成で一定の評価を得ないことには、Q10 有用性の改善は図れません。試しに Q9 目標達成 < 4.0 の授業を除外して同様のグラフを作成してみたところ、箱の下端にはすべての学年で 0.3 ポイント以上の上昇が見られ、極めて良好な評価分布（下右図）が出現しました。

相関係数	Q10
Q1 教員目標明示	.549
Q2 教員努力	.583
Q3 教員シラバス対応	.508
Q4 課題、準備・復習指示	.479
Q5 教員質問相談対応	.545
Q6 教材・教具効果	.553
Q7 授業に臨む姿勢	.616
Q8 質問・調査努力	.550
Q9 目標達成	.616
Q10 有用性	
Q11 興味関心の向上	.705
Q12 総合評価	.745
Q13 出席率	.222
Q14 平均学習時間	.253



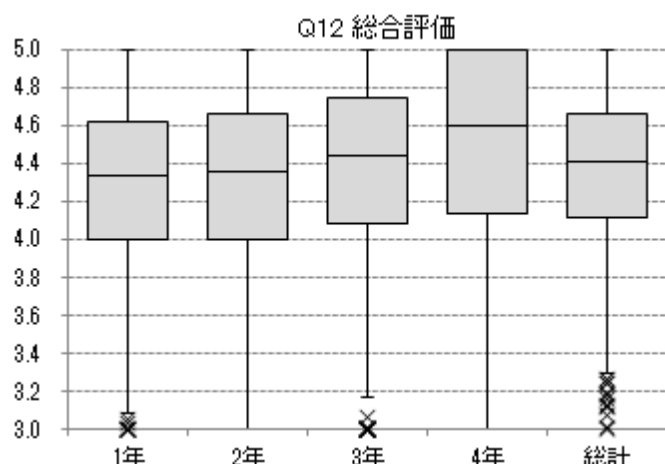
Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった

Q10 有用性が、特に箱の下端において学年間での差が小さいのに対し、Q12 興味関心の向上は学年での違いが顕著です。喫緊の改善が必要な授業は、各学年の箱の下端に届かない位置にある授業です。関連分野についての知識・理解が増えるにつれて学習した事柄の周辺にあるものをイメージできるようになり、その中に興味関心を見出していくのは



想像に難しくなく、評価の向上にはある程度まで既習の領域が増えるのを待つしかない場合もあるかもしれませんが、学年内での評価分布にもある程度の差があることを鑑みると、何らかの手はありそうです。授業内で関連領域に言及する機会を増やすことなどで、改善を図ってみましょう。

Q12 全体として、この授業を受けてよかった



相関係数	Q12
Q1教員目標明示	.592
Q2教員努力	.636
Q3教員シラバス対応	.543
Q4課題、準備・復習指示	.491
Q5教員質問相談対応	.589
Q6教材・教具効果	.598
Q7授業に臨む姿勢	.623
Q8質問・調査努力	.526
Q9目標達成	.593
Q10有用性	.745
Q11興味関心の向上	.772
Q12総合評価	
Q13出席率	.227
Q14平均学習時間	.242

学んだことの価値を知るには、広く学問領域を見渡すだけの知識も必要と思われ、実際に3年生、4年生の方が高い評価になっています。科目区分×学年の平均において各学年の総計平均を目指すのが、授業改善を進める上での目安になるかと存じます。右上の相関係数一覧から判断すると、Q10有用性で「この授業で得たものは、今後の学習活動や人生に生きる」と感じさせ、Q11興味関心の向上で「この科目や関連分野が好きになった」と答えさせることが、この項目の評価を分けていると考えられますが、いずれも学問領域を広く見渡すことを要件としており、改善目標の設定にあたり、如上の考え方には一理ありそうです。

なお、下表に示す通り、科目区分ごとに小さからぬ差が生じています。赤い網掛けを施したセルが下位10区分、緑の網掛けが上位10区分です。

	1年	2年	3年	4年	総計
I類(学びの窓口)	4.02	4.06	4.02	4.24	4.05
I類(学びの技法)	4.22	4.08	4.30	4.28	4.18
基盤教育	3.83				3.83
基盤・専門融合教育	3.79				3.79
仏教学科	4.30	4.47	4.52	4.69	4.49
社会福祉学科	4.37	4.24	4.34	4.33	4.31
人間環境学科	4.52	4.21	4.25	4.35	4.35
臨床心理学科	4.61	4.29	4.52	4.73	4.46
人間科学科	4.05	3.98	4.11	3.98	4.04
心理社会学部共通	3.93				3.93
教育人間学科	4.43	4.36	4.27	4.61	4.37
人文学科・日本文学科	4.34	4.28	4.40	4.47	4.35
歴史学科	4.16	4.13	4.12	4.37	4.17
表現文化学科(表現学部)	4.43	4.35	4.40	4.47	4.40
地域創生学科	3.64				3.64
第Ⅱ類科目(学部共通)	4.35	4.69	4.49	4.50	4.49
第Ⅲ類科目	4.64	4.17	4.19	4.37	4.24
総計	4.19	4.18	4.30	4.44	4.23

Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか

科目区分	学年	回答数	平均	標準偏差	平均-SD	平均+SD
I 類(学びの窓口)	1 年	1,490	4.61	0.70	3.92	5.00
	2 年	1,201	4.41	0.73	3.68	5.00
	3 年	649	4.36	0.73	3.63	5.00
	4 年	188	4.03	0.81	3.22	4.84
	計	3,528	4.47	0.74	3.73	5.00
I 類(学びの技法)	1 年	4,175	4.64	0.66	3.98	5.00
	2 年	2,975	4.47	0.73	3.74	5.00
	3 年	585	4.33	0.76	3.58	5.00
	4 年	230	3.99	0.84	3.15	4.82
	計	7,965	4.53	0.71	3.82	5.00
基盤教育	1 年	371	4.56	0.74	3.82	5.00
	計	371	4.56	0.74	3.82	5.00
基盤・専門融合教育	1 年	503	4.55	0.80	3.75	5.00
	計	504	4.55	0.80	3.75	5.00
仏教学科	1 年	493	4.49	0.77	3.72	5.00
	2 年	534	4.34	0.84	3.50	5.00
	3 年	1,036	4.48	0.70	3.78	5.00
	4 年	410	4.39	0.78	3.61	5.00
	計	2,473	4.44	0.76	3.67	5.00
社会福祉学科	1 年	400	4.76	0.59	4.17	5.00
	2 年	696	4.66	0.61	4.04	5.00
	3 年	697	4.62	0.67	3.95	5.00
	4 年	346	4.50	0.69	3.81	5.00
	計	2,139	4.64	0.64	3.99	5.00
人間環境学科	1 年	200	4.76	0.57	4.19	5.00
	2 年	180	4.49	0.69	3.81	5.00
	3 年	102	4.46	0.81	3.65	5.00
	4 年	49	4.39	0.78	3.61	5.00
	計	531	4.58	0.70	3.88	5.00
臨床心理学科	1 年	218	4.72	0.58	4.13	5.00
	2 年	563	4.60	0.68	3.92	5.00
	3 年	433	4.56	0.67	3.89	5.00
	4 年	152	4.39	0.78	3.61	5.00
	計	1,366	4.58	0.68	3.90	5.00
人間科学科	1 年	171	4.59	0.77	3.82	5.00
	2 年	712	4.60	0.70	3.90	5.00
	3 年	565	4.65	0.63	4.02	5.00
	4 年	63	3.90	0.75	3.15	4.65
	計	1,511	4.59	0.70	3.89	5.00

科目区分	学年	回答数	平均	標準偏差	平均-SD	平均+SD
心理社会学部共通	1年	542	4.58	0.77	3.82	5.00
	計	562	4.57	0.77	3.80	5.00
教育人間学科	1年	342	4.77	0.54	4.23	5.00
	2年	635	4.54	0.71	3.84	5.00
	3年	406	4.56	0.67	3.88	5.00
	4年	122	4.32	0.80	3.52	5.00
	計	1,505	4.58	0.68	3.90	5.00
人文学科・日本文学科	1年	653	4.66	0.64	4.03	5.00
	2年	719	4.59	0.66	3.93	5.00
	3年	634	4.41	0.74	3.67	5.00
	4年	330	4.15	0.81	3.34	4.97
	計	2,336	4.50	0.72	3.78	5.00
歴史学科	1年	822	4.74	0.59	4.15	5.00
	2年	903	4.58	0.69	3.90	5.00
	3年	908	4.50	0.70	3.79	5.00
	4年	419	4.35	0.74	3.61	5.00
	計	3,052	4.57	0.69	3.88	5.00
表現文化学科(表現学部)	1年	1,017	4.70	0.61	4.09	5.00
	2年	982	4.49	0.70	3.80	5.00
	3年	813	4.51	0.73	3.78	5.00
	4年	368	4.14	0.85	3.29	4.99
	計	3,180	4.52	0.72	3.80	5.00
地域創生学科	1年	240	4.56	0.82	3.74	5.00
	計	240	4.56	0.82	3.74	5.00
第Ⅱ類科目(学部共通)	1年	65	4.58	0.78	3.80	5.00
	2年	42	4.74	0.54	4.20	5.00
	3年	81	4.62	0.64	3.98	5.00
	4年	36	4.31	0.88	3.43	5.00
	計	224	4.58	0.72	3.86	5.00
第Ⅲ類科目	1年	169	4.95	0.21	4.74	5.00
	2年	740	4.66	0.64	4.02	5.00
	3年	720	4.58	0.67	3.90	5.00
	4年	158	4.27	0.73	3.55	5.00
	計	1,787	4.62	0.65	3.97	5.00
総計		33,274	4.54	0.71	3.83	5.00

【上表の見方】 「平均」「平均-SD」の各列で、科目小計と総計を除く上位20%のセルには緑色の網掛けを、下位20%のセルには赤の網掛けを施してあります。「平均+SD」は満点を超えるものは一括して5.0としてあります。単純計算では、平均±標準偏差の範囲に約2/3の学生が含まれます。なお、サンプルサイズ(回答数)が20未満のセルは非表示にいたしました。各数値の目安として、4.0なら出席率75%、3.0なら同60%とお考えいただけます。

Q14 この授業のための課題、準備・復習に何時間取り組みましたか

科目区分	学年	回答数	平均	標準偏差	平均-SD	平均+SD
I 類(学びの窓口)	1 年	1,489	2.28	1.15	1.13	3.43
	2 年	1,194	2.23	1.19	1.05	3.42
	3 年	649	2.33	1.22	1.11	3.55
	4 年	188	2.55	1.11	1.44	3.67
	計	3,520	2.29	1.18	1.11	3.46
I 類(学びの技法)	1 年	4,179	2.73	1.15	1.58	3.87
	2 年	2,974	2.70	1.19	1.51	3.89
	3 年	584	2.79	1.13	1.66	3.93
	4 年	230	2.84	1.03	1.81	3.87
	計	7,967	2.72	1.16	1.57	3.88
基盤教育	1 年	371	2.42	1.15	1.27	3.56
	計	371	2.42	1.15	1.27	3.56
基盤・専門融合教育	1 年	505	2.25	1.12	1.12	3.37
	計	506	2.25	1.12	1.12	3.37
仏教学科	1 年	492	2.54	1.29	1.25	3.83
	2 年	533	2.50	1.26	1.23	3.76
	3 年	1,036	2.78	1.23	1.55	4.02
	4 年	411	3.05	1.33	1.72	4.37
	計	2,472	2.72	1.28	1.43	4.00
社会福祉学科	1 年	400	2.93	1.22	1.70	4.15
	2 年	694	2.82	1.10	1.73	3.92
	3 年	698	2.88	1.30	1.58	4.18
	4 年	345	3.10	1.31	1.79	4.40
	計	2,137	2.90	1.23	1.68	4.13
人間環境学科	1 年	200	2.68	1.27	1.41	3.94
	2 年	180	2.97	1.22	1.74	4.19
	3 年	102	3.08	1.43	1.65	4.51
	4 年	49	3.57	1.11	2.46	4.68
	計	531	2.93	1.30	1.63	4.23
臨床心理学科	1 年	218	2.74	1.22	1.52	3.96
	2 年	563	2.40	1.25	1.15	3.65
	3 年	432	2.68	1.27	1.40	3.95
	4 年	152	3.31	1.18	2.13	4.49
	計	1,365	2.64	1.27	1.37	3.92
人間科学科	1 年	170	2.88	1.17	1.72	4.05
	2 年	713	2.40	1.24	1.16	3.64
	3 年	565	2.46	1.26	1.20	3.71
	4 年	61	2.08	0.93	1.15	3.01
	計	1,509	2.46	1.24	1.22	3.70

科目区分	学年	回答数	平均	標準偏差	平均-SD	平均+SD
心理社会学部共通	1年	542	2.42	1.17	1.25	3.60
	計	563	2.45	1.18	1.26	3.63
教育人間学科	1年	343	2.62	1.33	1.29	3.96
	2年	635	3.06	1.30	1.75	4.36
	3年	406	3.06	1.28	1.77	4.34
	4年	122	3.38	1.33	2.05	4.70
	計	1,506	2.98	1.32	1.66	4.31
人文学科・日本文学科	1年	654	2.62	1.16	1.47	3.78
	2年	720	2.57	1.12	1.44	3.69
	3年	635	2.71	1.21	1.49	3.92
	4年	329	2.93	1.26	1.68	4.19
	計	2,338	2.67	1.18	1.49	3.85
歴史学科	1年	821	2.71	1.19	1.52	3.90
	2年	904	2.74	1.16	1.58	3.90
	3年	909	2.57	1.22	1.35	3.80
	4年	419	3.05	1.25	1.80	4.31
	計	3,053	2.73	1.21	1.52	3.93
表現文化学科(表現学部)	1年	1,019	2.74	1.16	1.58	3.90
	2年	983	2.57	1.30	1.28	3.87
	3年	811	2.92	1.34	1.59	4.26
	4年	368	3.01	1.31	1.70	4.31
	計	3,181	2.77	1.28	1.49	4.04
地域創生学科	1年	239	2.78	1.17	1.62	3.95
	計	239	2.78	1.17	1.62	3.95
第Ⅱ類科目(学部共通)	1年	65	2.22	1.18	1.03	3.40
	2年	40	3.48	1.50	1.98	4.97
	3年	81	3.00	1.37	1.63	4.37
	4年	36	2.94	1.33	1.61	4.28
	計	222	2.85	1.41	1.44	4.26
第Ⅲ類科目	1年	169	3.64	0.94	2.70	4.59
	2年	739	2.68	1.28	1.40	3.96
	3年	722	2.65	1.21	1.44	3.86
	4年	158	3.09	1.26	1.83	4.35
	計	1,788	2.80	1.26	1.54	4.06
総計		33,268	2.68	1.23	1.45	3.91

【上表の見方】 「平均」「平均-SD (標準偏差)」「平均+SD (同)」の各列の中で、科目小計と総計を除く上位 20%のセルには緑色の網掛けを、下位 20%のセルには赤色の網掛けを施してあります。単純計算では、平均±標準偏差の範囲には約 2/3 の学生が含まれることになります。前項同様に、サンプルサイズ(回答数)が 20 未満のセルは非表示といたしました。各数値の目安として、4.0 なら平均学習時間 61 分以上、3.0 なら同 31 分以上とお考え下さい。

参考資料 1

実施率／回収率

参考資料1-1. アンケート実施率(回収率)科目区分別

■学部15科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	0%	20%	40%	60%	80%	100%
01 I類(諸外国語)	301	1	1	100.0%					
02 I類(学びの窓口)	302	47	47	100.0%					
06 基盤・専門融合教育	306	13	13	100.0%					
12 心理社会学部共通	312	6	6	100.0%					
15 教育人間学科	313	55	55	100.0%					
03 I類(学びの技法)	303	248	247	99.6%					
17 表現文化学科(表現学部)	317	138	137	99.3%					
07 仏教学科	307	137	134	97.8%					
14 人文学科・日本文学科	314	83	80	96.4%					
15 歴史学科	315	110	106	96.4%					
10 臨床心理学科	310	53	50	94.3%					
08 社会福祉学科	308	79	74	93.7%					
09 人間環境学科	309	31	29	93.5%					
18 地域創生学科	318	14	13	92.9%					
20 第Ⅲ類科目	320	65	58	89.2%					
05 基盤教育	305	18	16	88.9%					
11 人間科学科	311	50	43	86.0%					
19 第Ⅱ類科目(学部共通)	319	17	14	82.4%					
計	1166	1123	96.3%						

■大学院7科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	0%	20%	40%	60%	80%	100%
05 院宗教学専攻(修士・博士)	305	8	8	100.0%					
07 院国文学専攻(修士・博士)	307	4	4	100.0%					
08 院比較文化専攻(修士・博士)	308	4	4	100.0%					
01 院仏教学専攻(修士・博士)	301	31	29	93.5%					
06 院史学専攻(修士・博士)	306	13	11	84.6%					
03 院臨床心理学専攻(修士)	303	19	16	84.2%					
02 院社会福祉学専攻(修士)	302	6	5	83.3%					
04 院人間科学専攻(修士)	304	6	3	50.0%					
計	91	80	87.9%						

参考資料1-2. アンケート実施率(学部) 2005年度春学期～2016年度春学期

年度	学期	回収率	回収数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166

参考資料 2

自由記述回答
頻出キーワード分析

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に「授業運営のために意見があれば具体的にお書きください。」として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1として出現頻度の上位10ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2による前回と前々回(＝前年同期)データに加え、今回の全学平均を表示しています。改善項目と悪化項目を明らかにすることで、とったアクションの効果を確認し、全学平均との比較により重点改善課題を抽出することにお役立て下さい。

課題の抽出

前回同様、集計グラフ内の肯定的内容のキーワードの頭に●を付しました。同じキーワードでも●付き(肯定的)と●なし(否定的)が存在する場合があります。

頻出キーワードの【全体】集計では「楽しい・面白い」、「分かりやすい」が引き続きの上位1位、2位をキープしました。出現率は昨年の春学期・秋学期を上回る結果となっています。なお、キーワード「楽しい・面白い」は従来同様「興味深い内容だった」「好きな授業」「充実した授業」などの意見も含んでいます。それぞれの言葉の使い方が学生により異なり言葉の定義として一貫しないことから、項目としては分けず積極的な肯定的意見としてまとめることが適当であるとの判断によります。

3位も前回と順位の変動はなく「分かりづらい」で、全学では昨年春学期とほぼ同じ出現率となりました。

4位以降は、「分かりづらい」の具体的な原因と思われる項目が並びます。順位に変動はありますが、多くは常連項目です。少々気がかりは、全学集計において「はやい」と「テスト」以外の項目で昨年度の春・秋を上回る出現率となっている点です。改善が望まれます。

また、「難しい」の出現率の増加が目立ちますが、その内容を見ると、85件の記述の内30%の26件がTOEICに関するものでした。「TOEIC」については番外として、授業の仕方や教材・テストについての様々な意見をまとめましたので、併せてご確認ください。

同じく番外ではありますが「質問」というキーワードが否定的、肯定的の両方で新しく出現しました。件数は少ないですが、アンケート固定質問のQ5「教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた」の結果も併せて見ると参考となる記述がありそうです。

なお今回より、学部別、回答人数帯別、学年別のキーワード件数をまとめた棒グラフを折線グラフに変更しました。増加した学部数に対応して見易い表現方法を検討した結果です。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

同一のキーワードを含む回答でも肯定的な意見と否定的な意見は項目として分けて集計をしています。

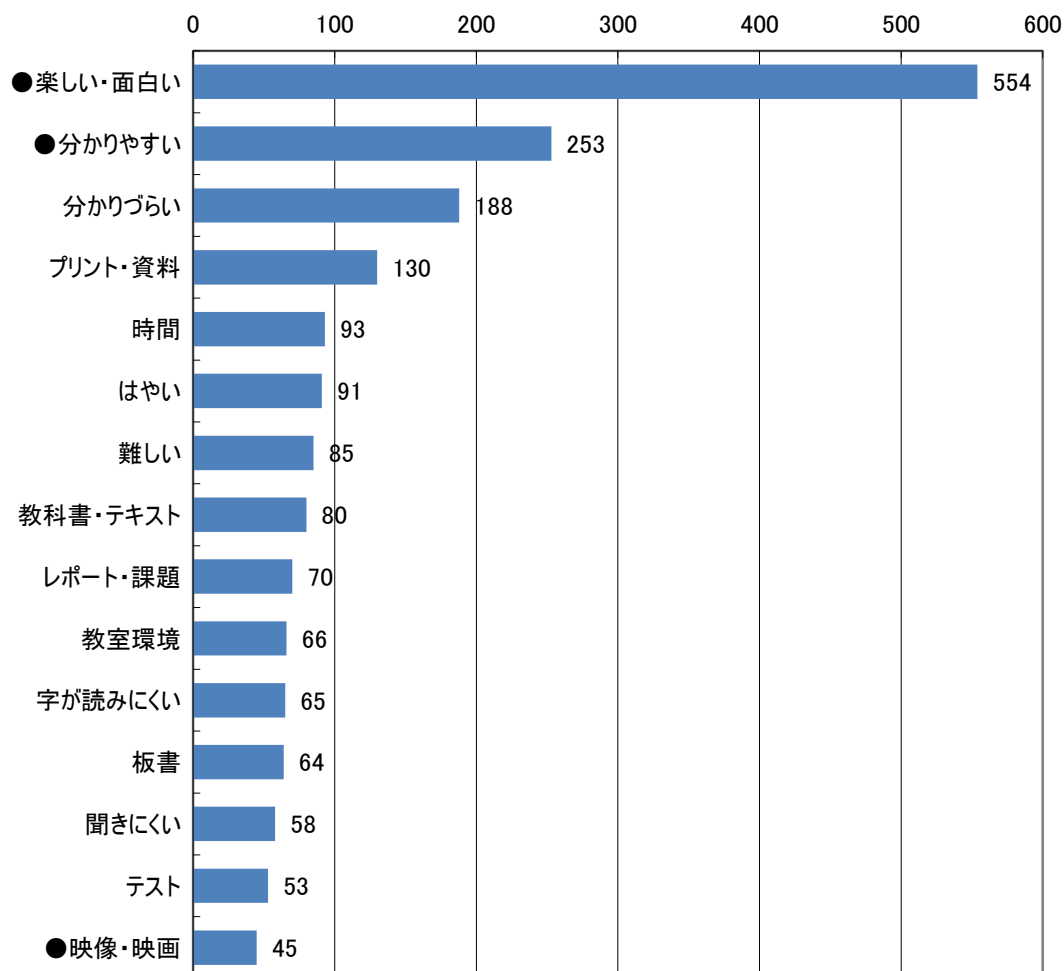
例えば「板書」というキーワードの内容は「板書が分かりにくい/板書をしてほしい・・・」(35頁下段表参照)など否定的なものあるいは要望等を集計しており、肯定的なものは含んでいません。

また、キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードとしてカウントしています。

※2 出現率について

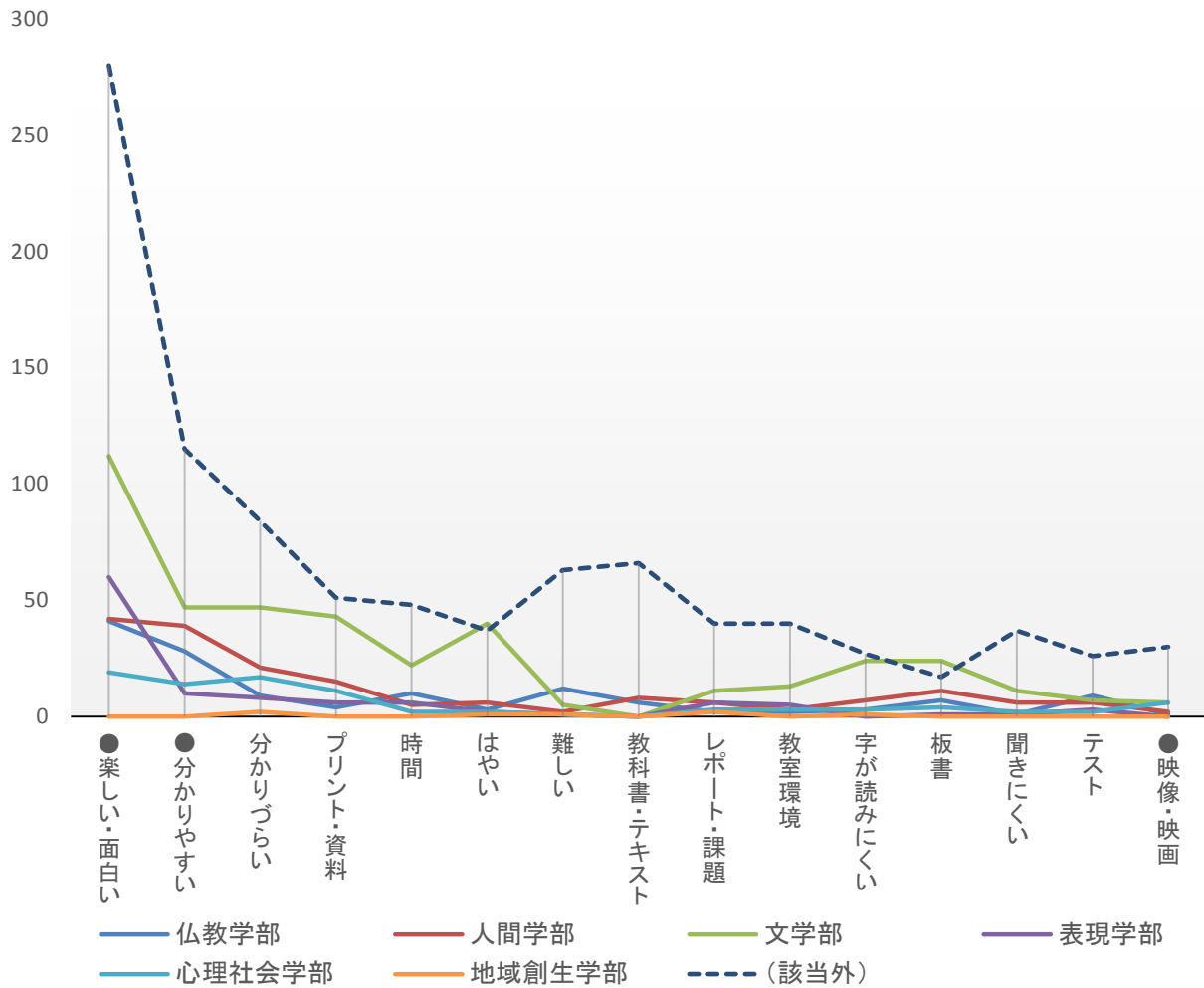
35ページ下段の説明を参照ください。

自由記述回答 頻出キーワード
【全学】

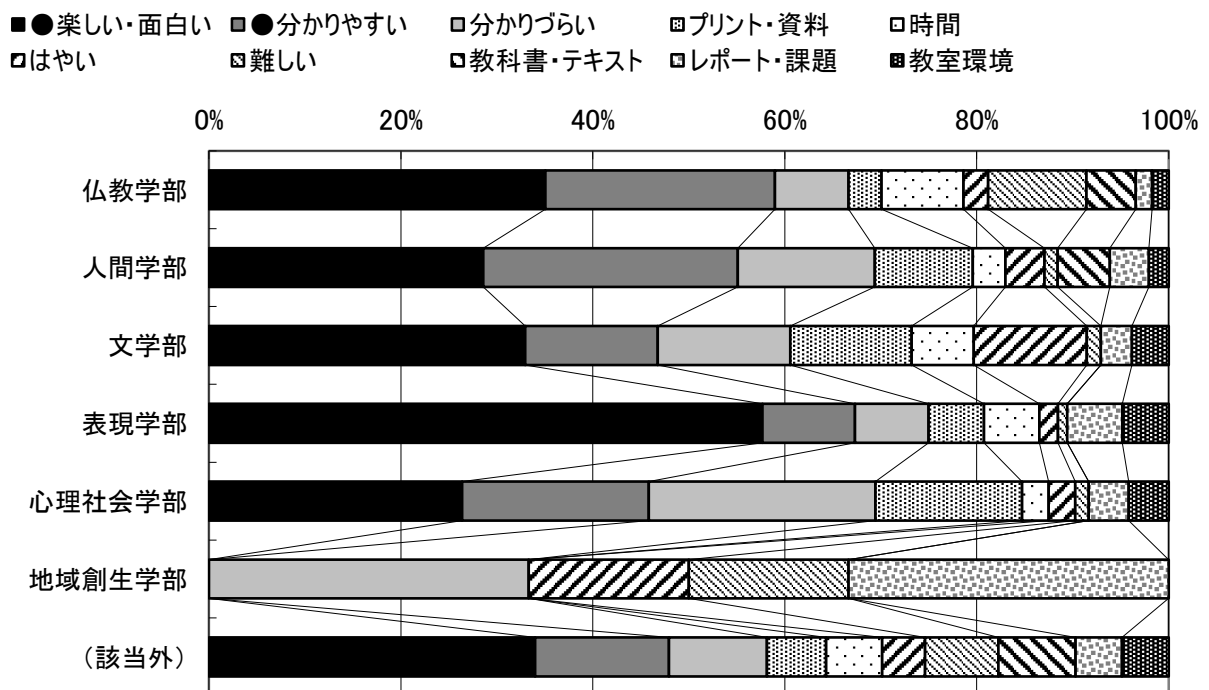


キーワード	主な内容
●楽しい・面白い	楽しかった／楽しい授業だった／面白かった
●分かりやすい	授業の仕方、説明、教え方、資料等が分かりやすかった 理解しやすかった
分かりづらい	分かりづらかった／説明・資料等が分かりにくい
プリント・資料	プリントが分かりにくい／プリントを配布してほしい／プリントの使い方について
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい
はやい	進行がはやくてついていけない／パワーポイント、スライドの画面替えが早すぎる
難しい	難しすぎる
教科書・テキスト	教科書がわかりにくい／教科書の使い方について
レポート・課題	レポート、課題の出し方を改善してほしい／評価のしかたについて
教室環境	教室が狭い／教室が暑い（または寒い）／空調が良くない
字が読みにくい	黒板・パワーポイント・スライド等の字が小さい・読みにくい／板書の字が汚く読めない／誤字脱字が多い
板書	板書が分かりにくい／板書してほしい／見づらい
聞きにくい	声が小さく聞こえない／聞き取りづらい／マイクを使ってほしい／マイクの音が聞こえない、聞きづらい
テスト	テストの実施方法、範囲／テスト時間が短い
●映像・映画	映像・ビデオ等で分かりやすく良かった、面白かった。
<以下番外>	
レジュメ	レジュメが欲しい。わかりにくい。見にくい。レジュメの内容について
うるさい	周囲がうるさい／私語が多い
●質問	質問に丁寧に答えてくれた。質問しやすかった。質問の有無を確認しながら進めてくれた
TOEIC	TOEIC授業の仕方、教材、テストについての意見
●グループワーク	グループワークは良かった、楽しかった、ためになった
質問	質問しづらい。質問にきちんと対応してくれない。

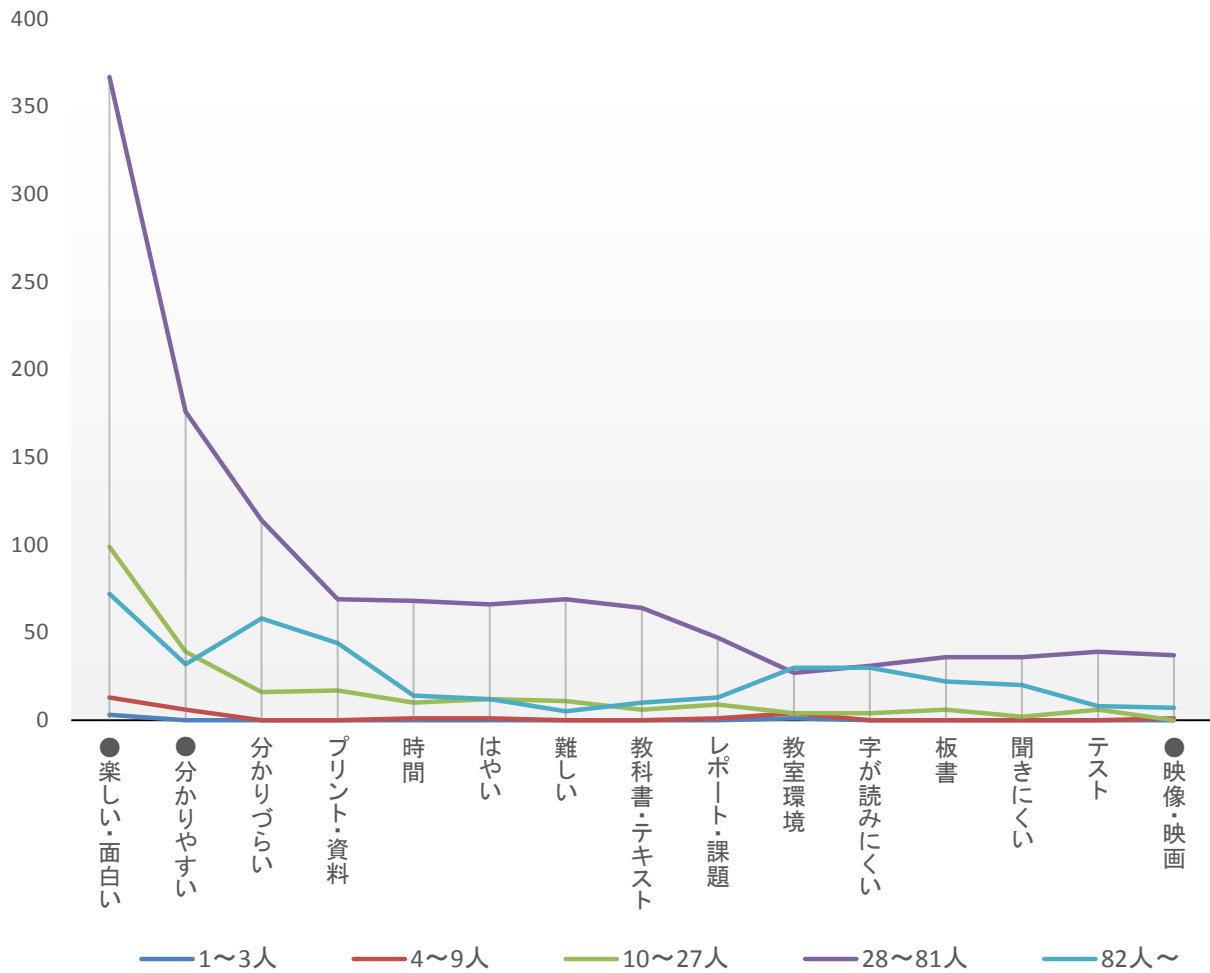
自由記述回答 頻出キーワード
【学部別】



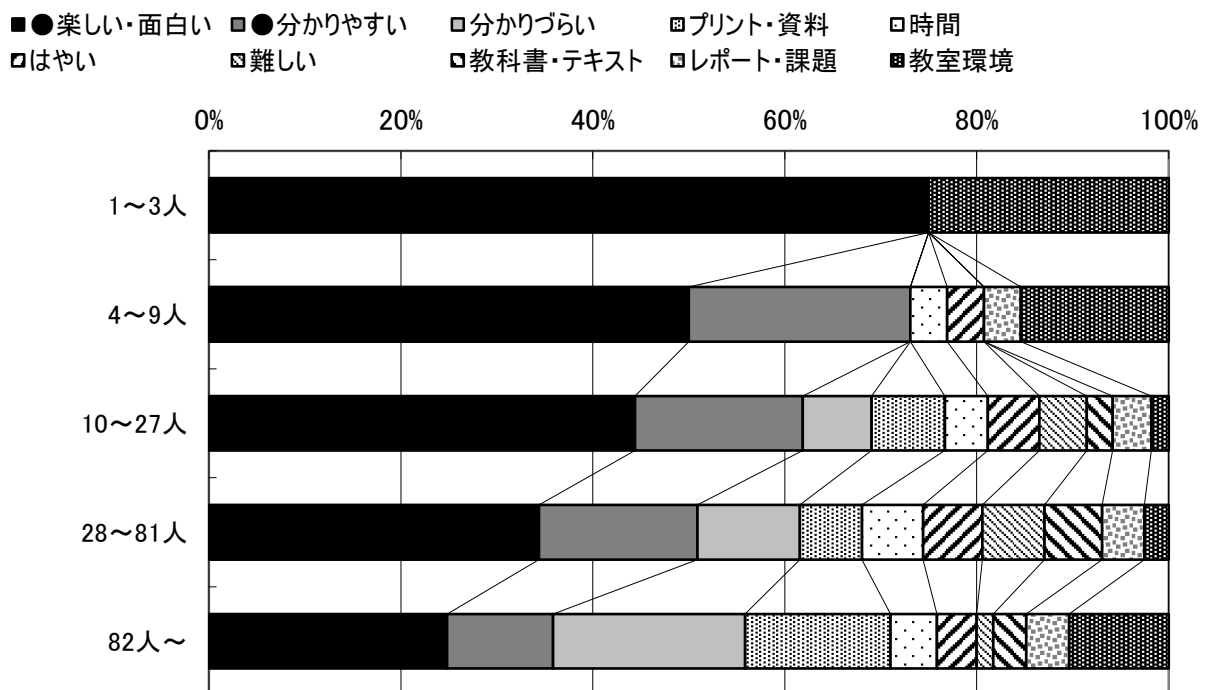
上位10項目の学部別割合



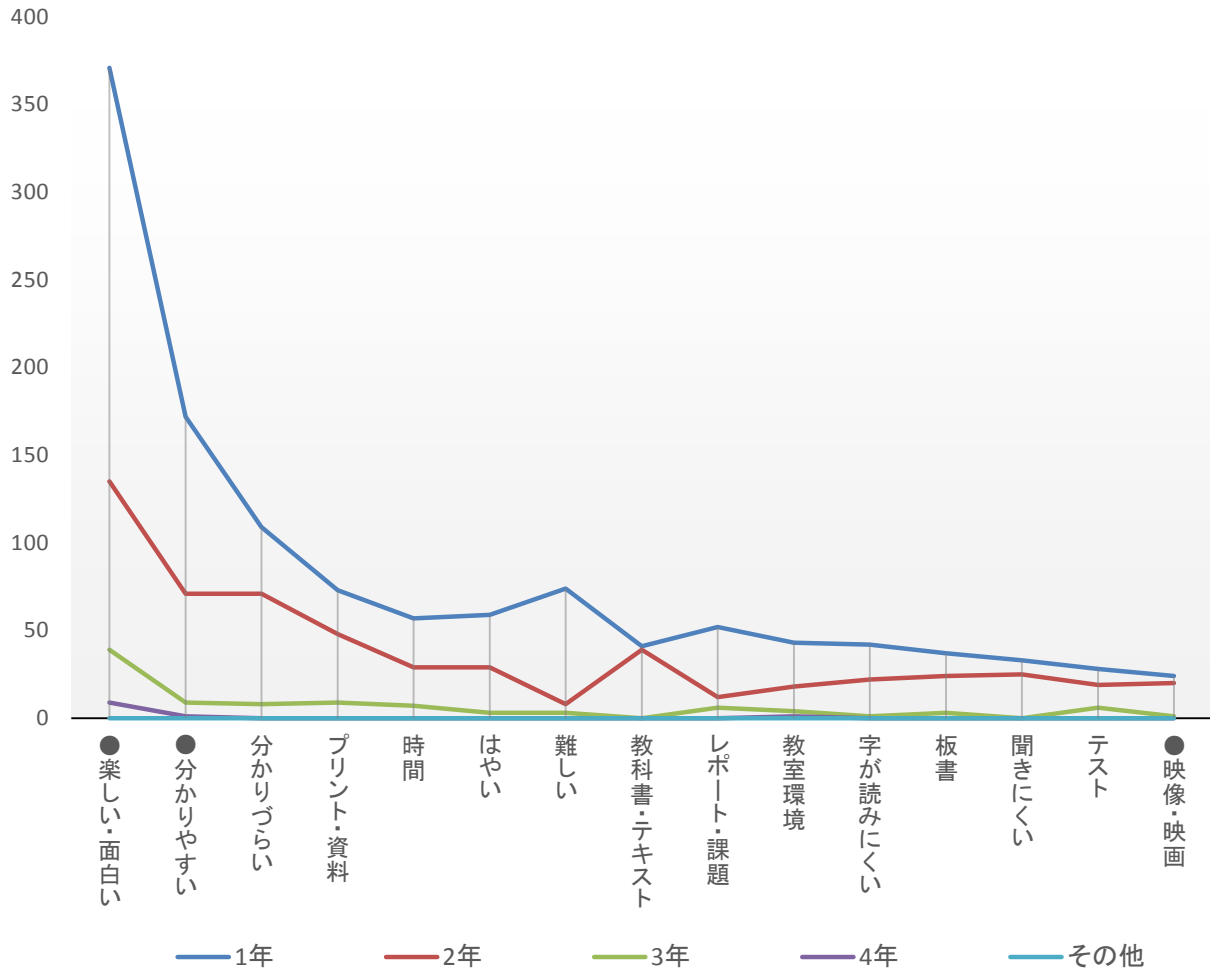
自由記述回答 頻出キーワード
【回答人数帯別】



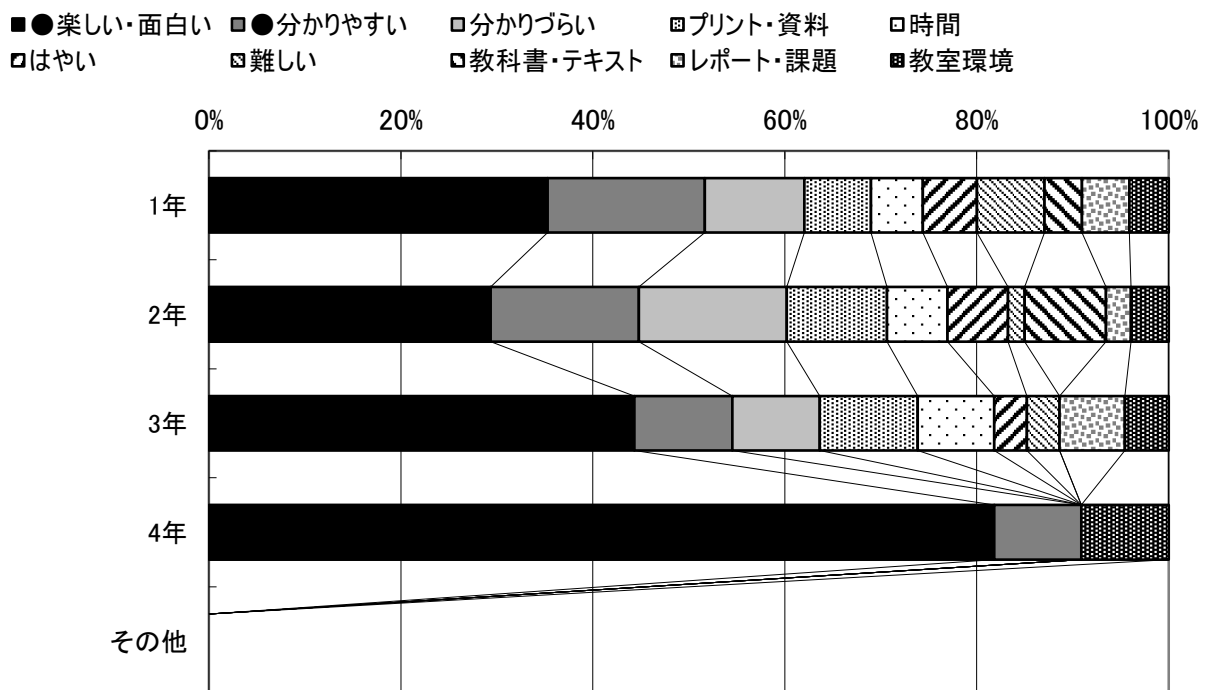
上位10項目の学部別割合



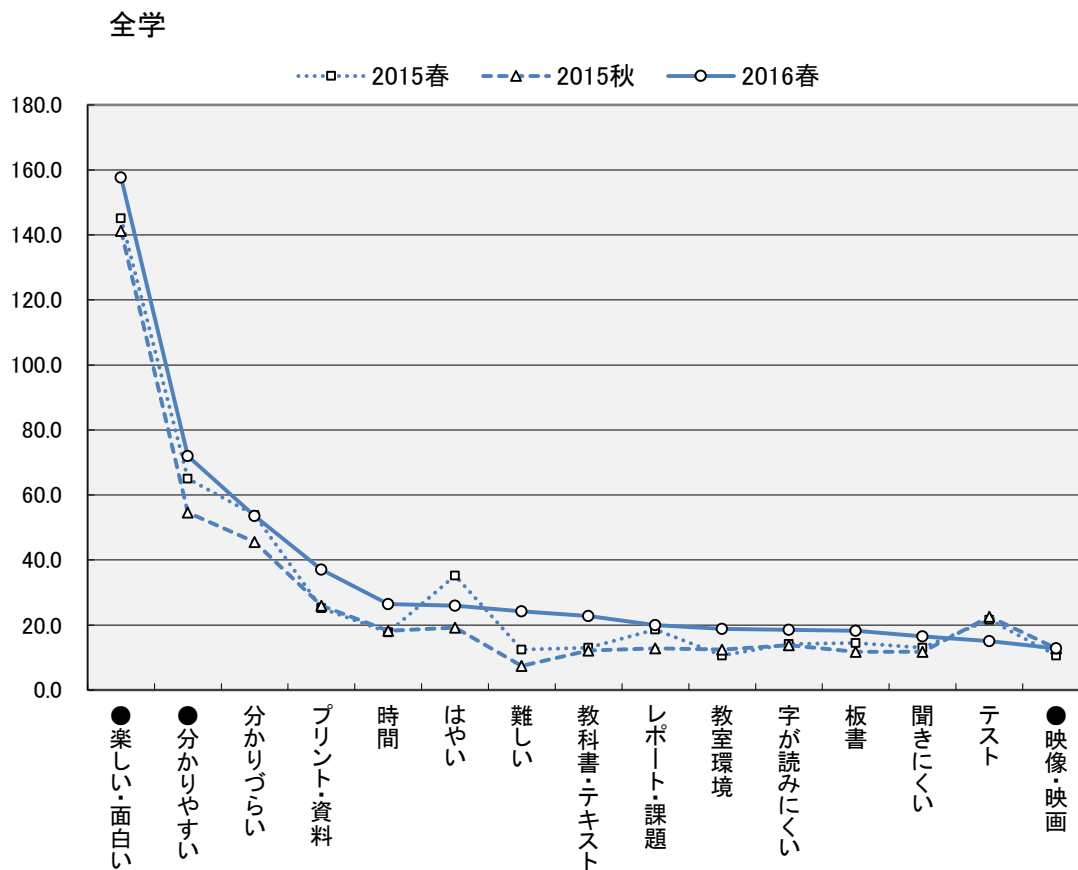
自由記述回答 頻出キーワード
【学年別】



上位10項目の学部別割合



自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】全学

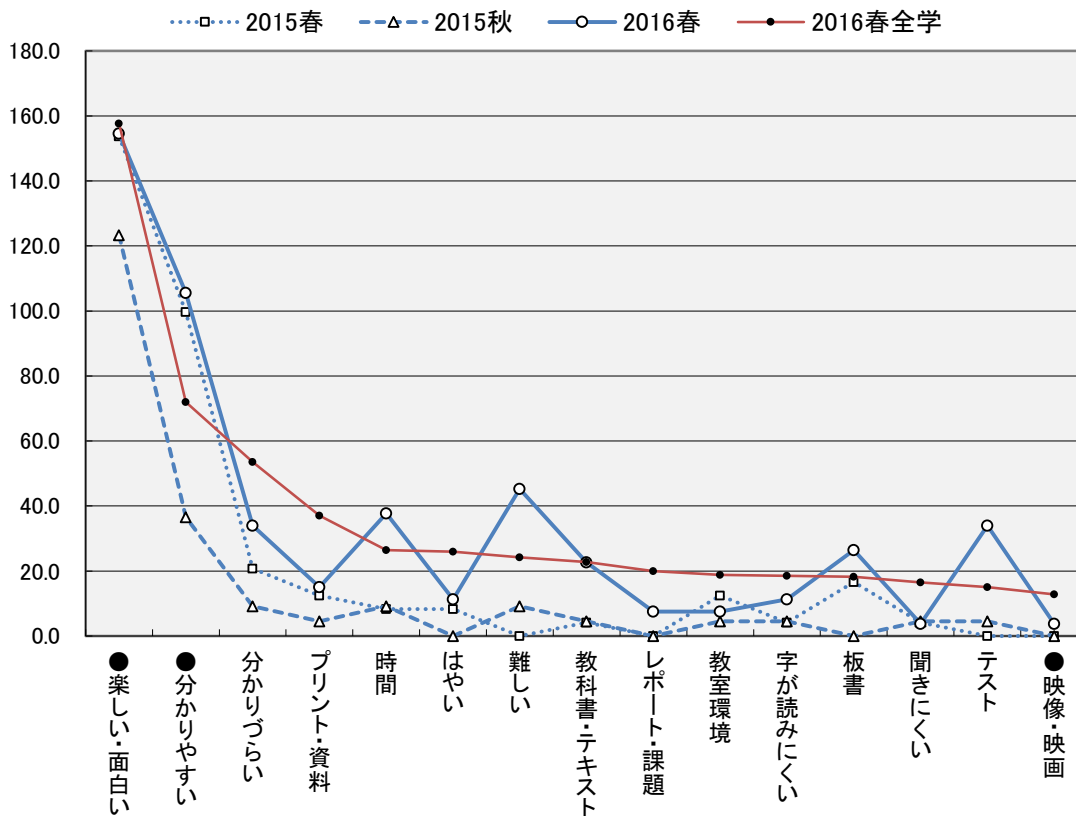


「出現率」について

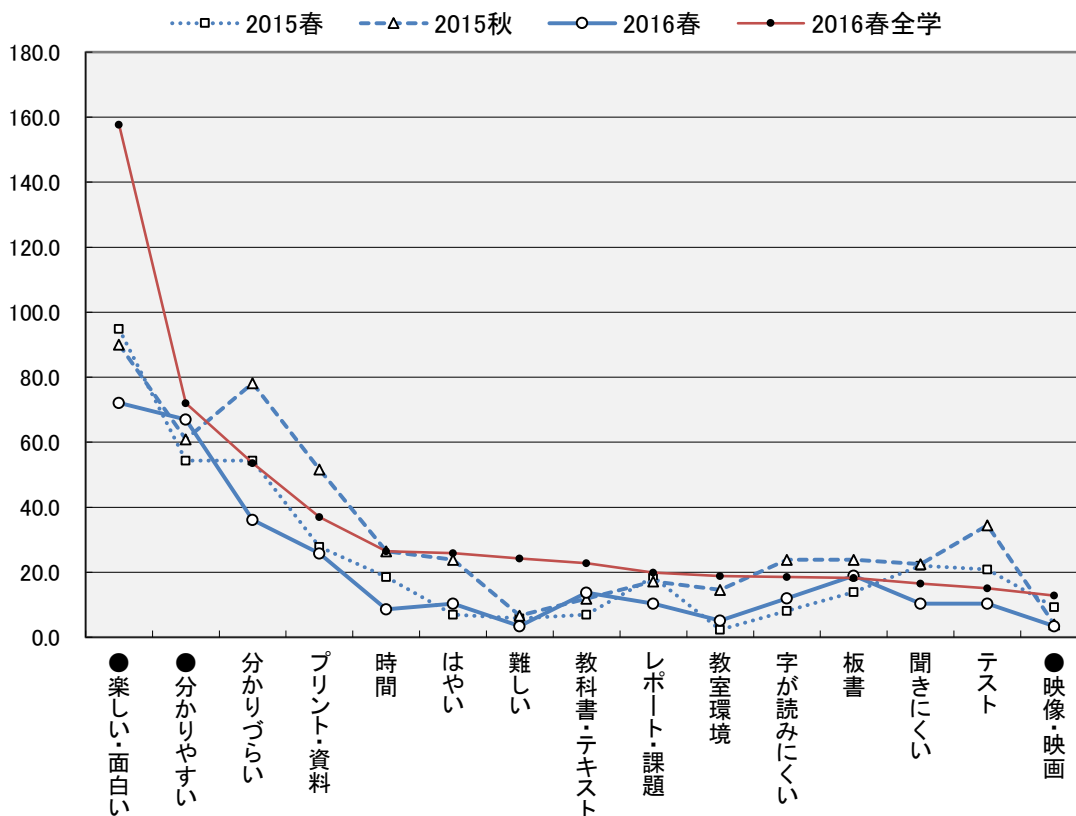
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10⁴
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。
- 前回との比較において、今回の出現率が下がっている項目は改善、上がっている項目は悪化です。

自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

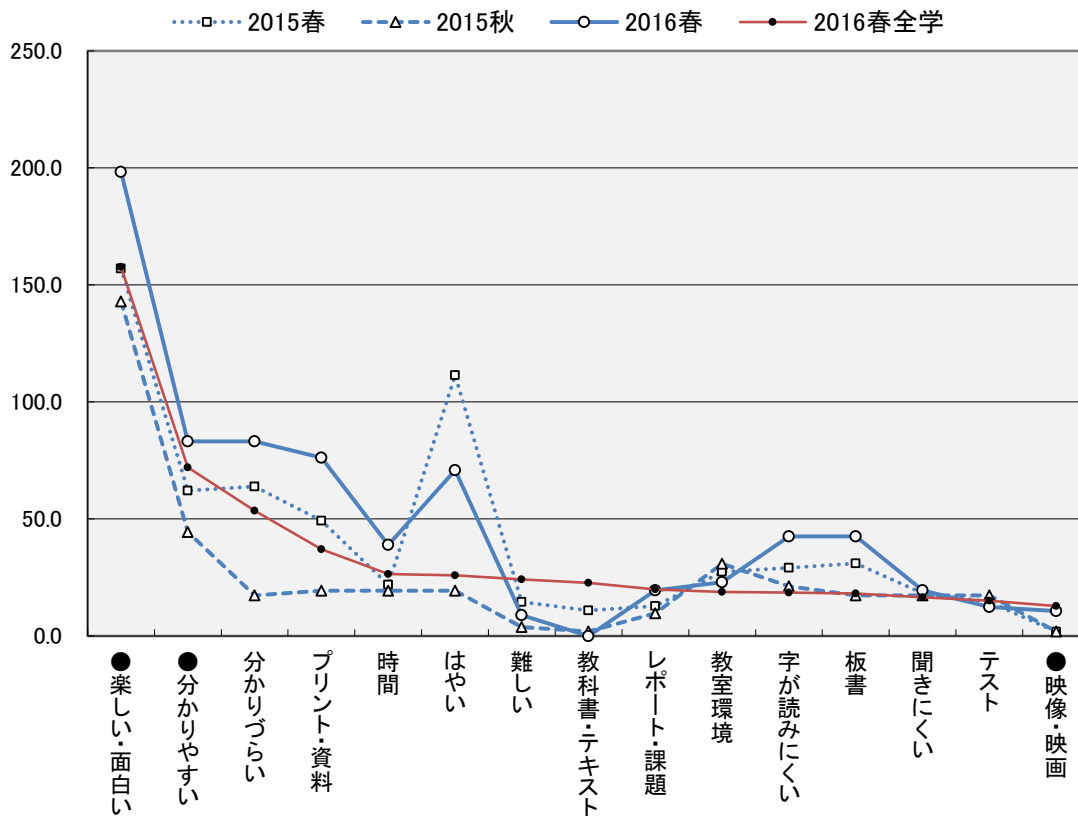


《人間学部》

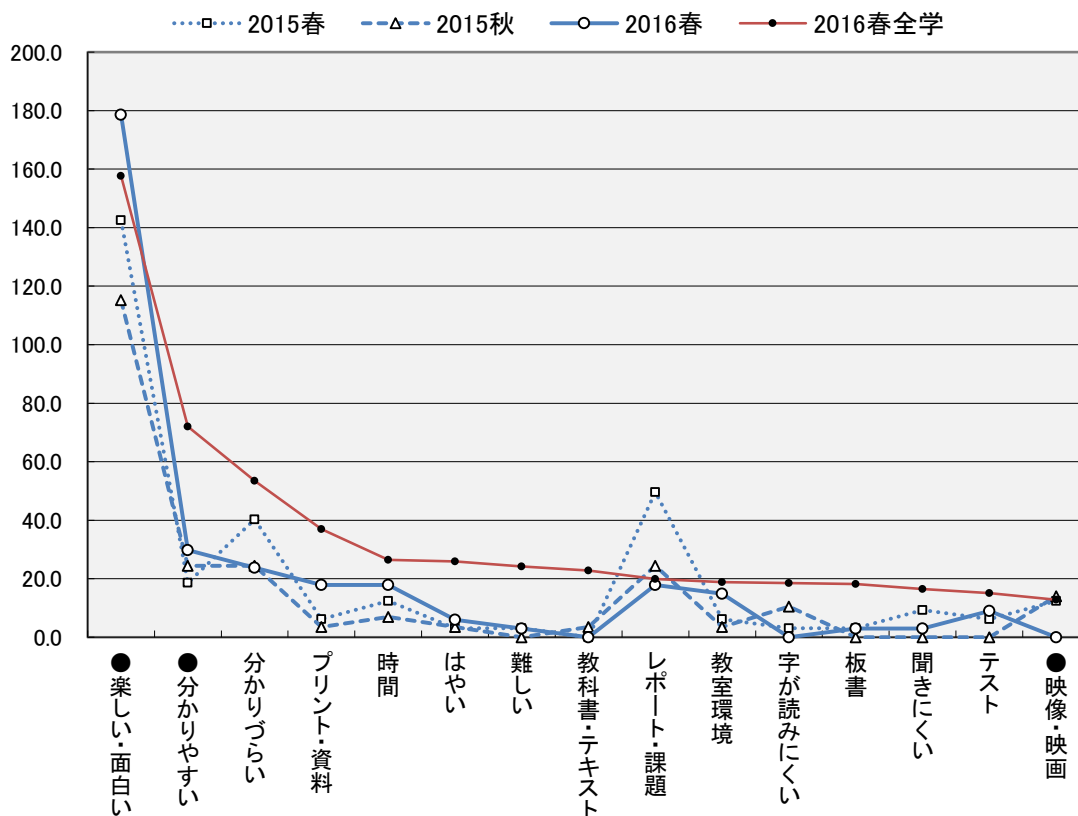


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

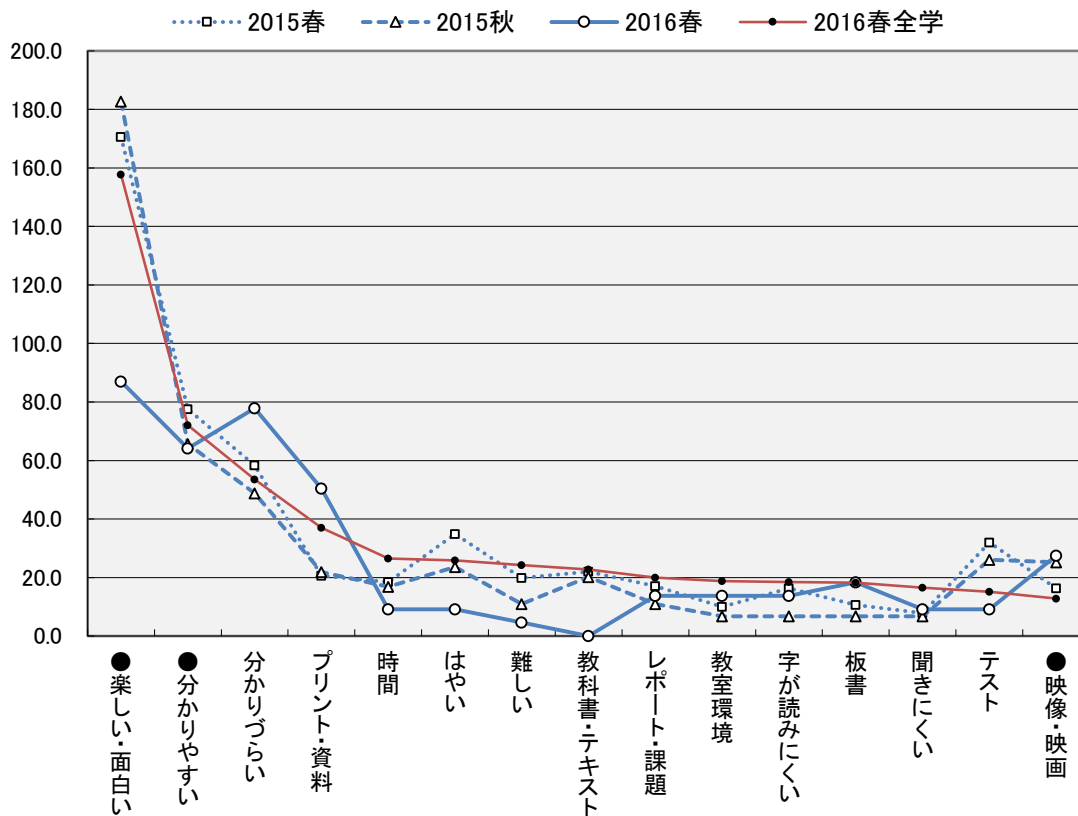


《表現学部》

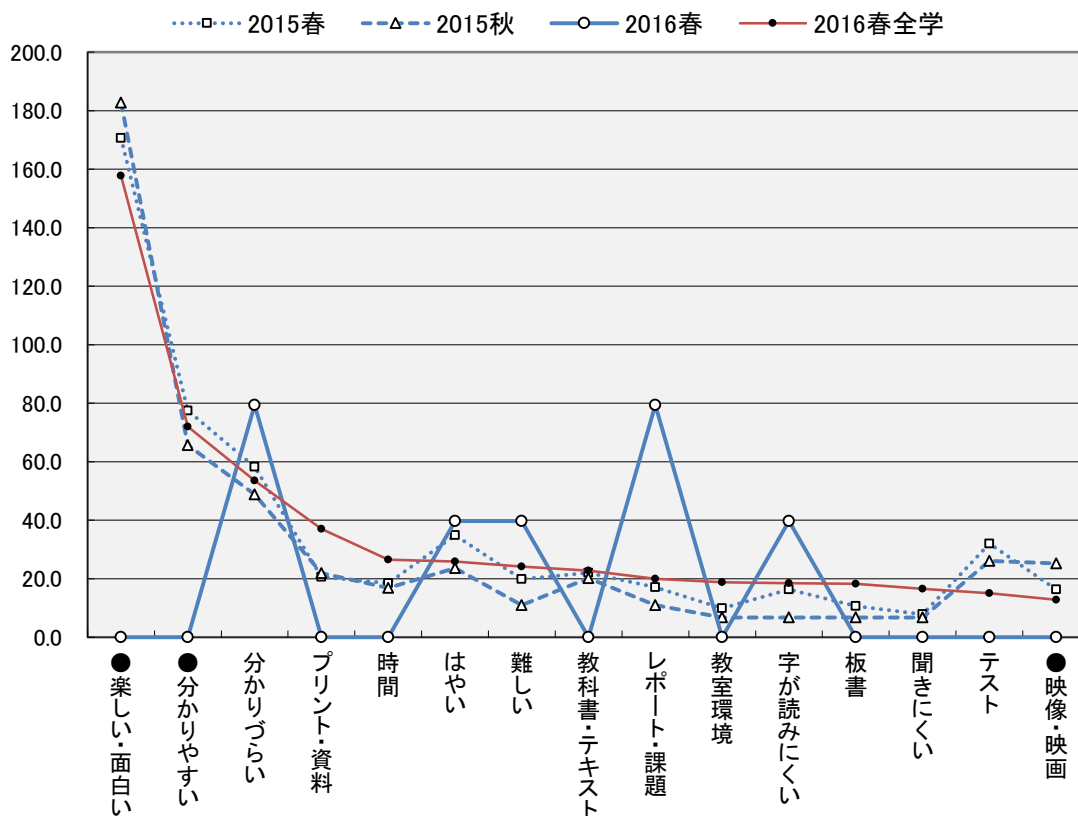


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】学部別

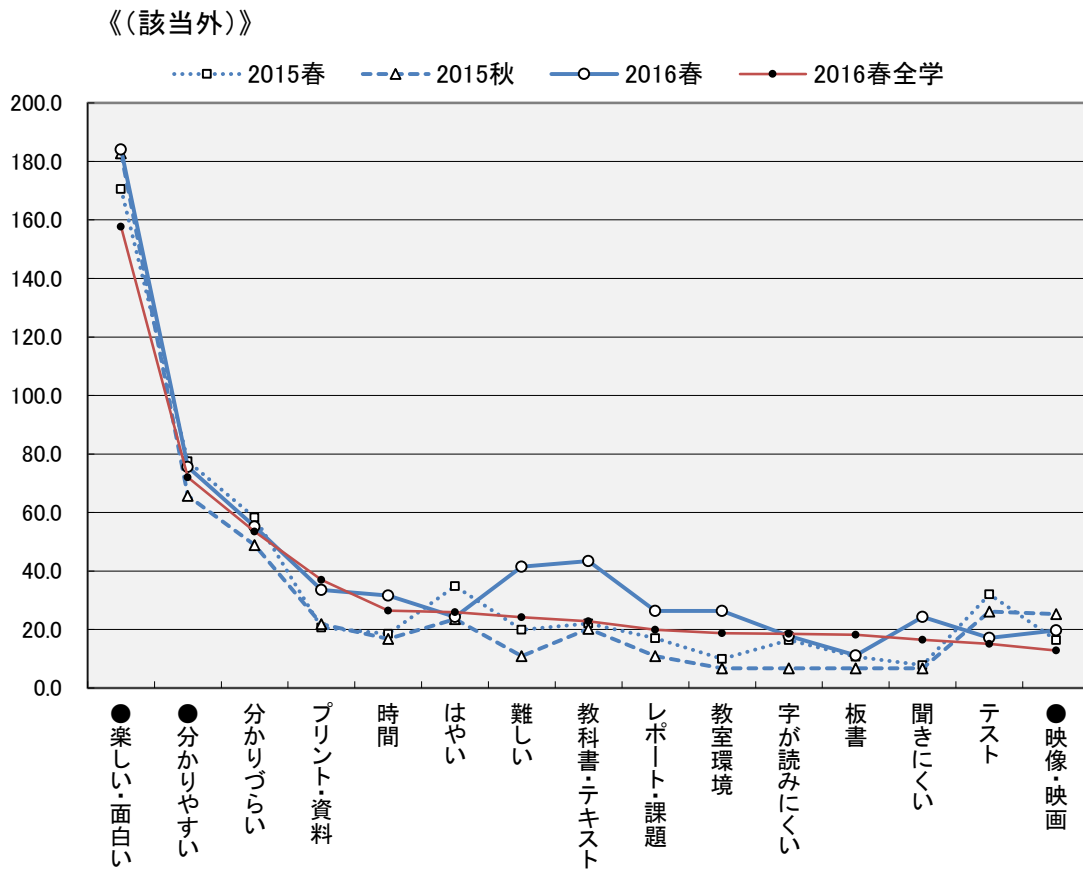
《心理社会学部》



《地域創生学部》

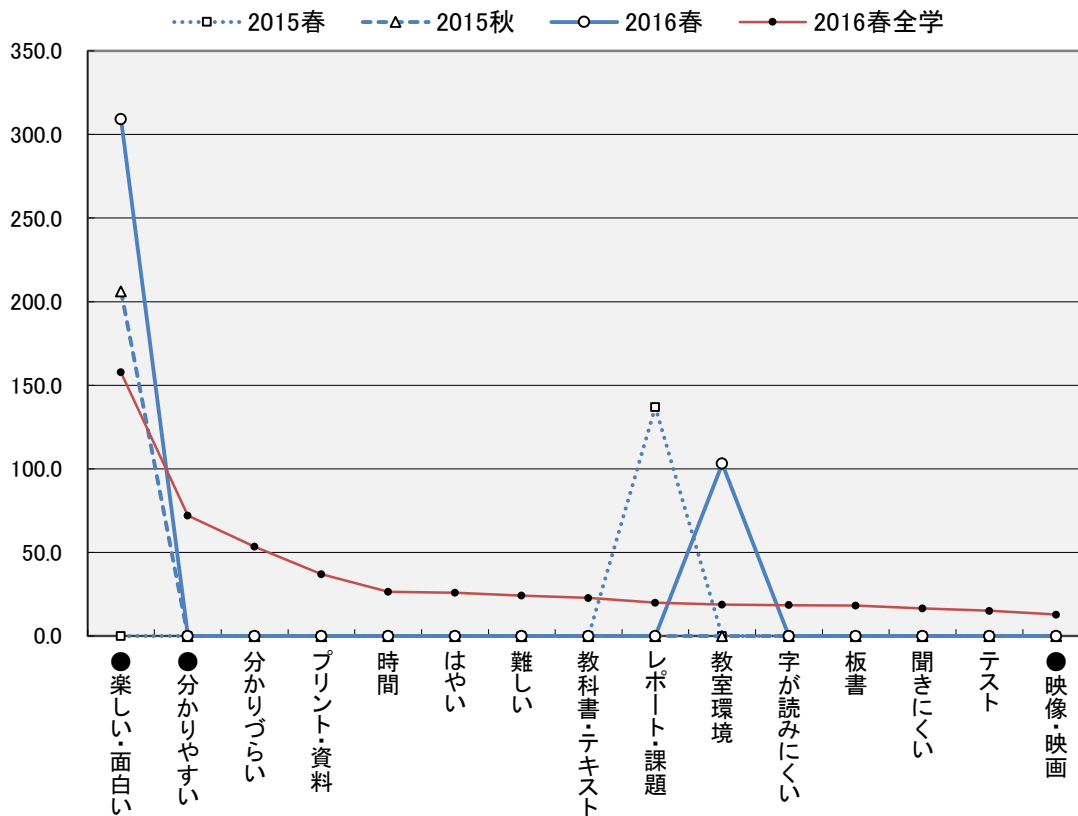


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】学部別

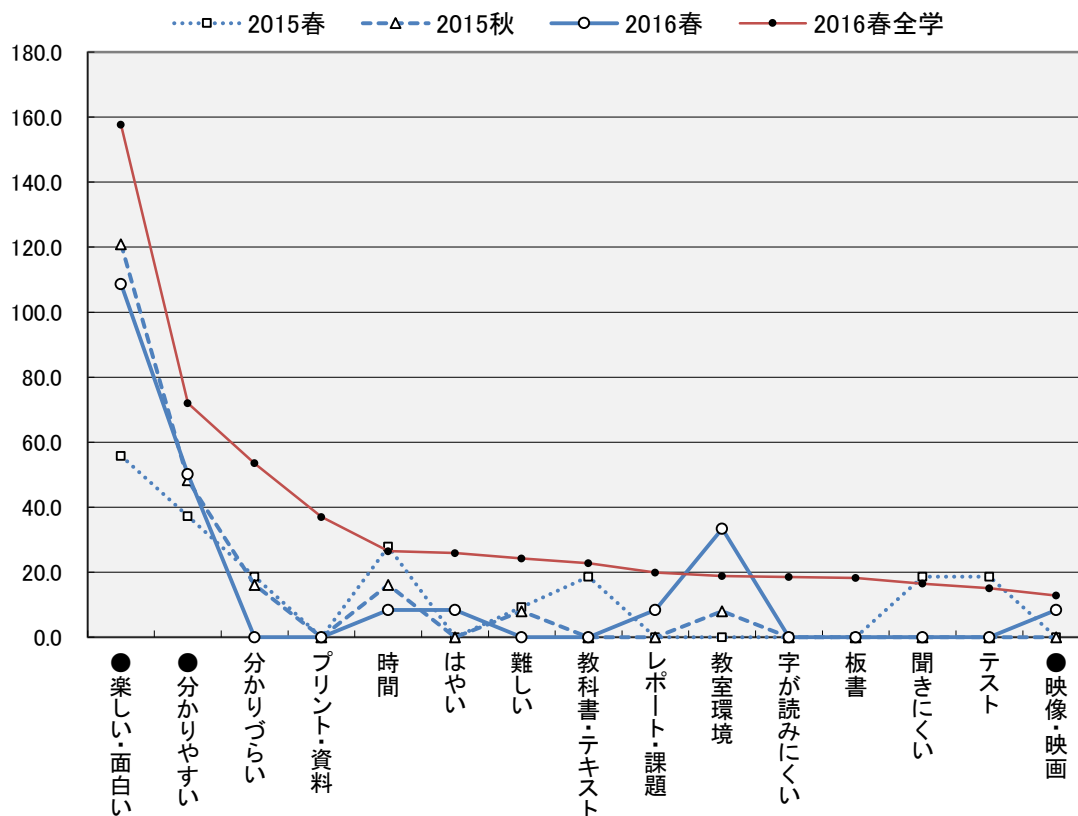


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

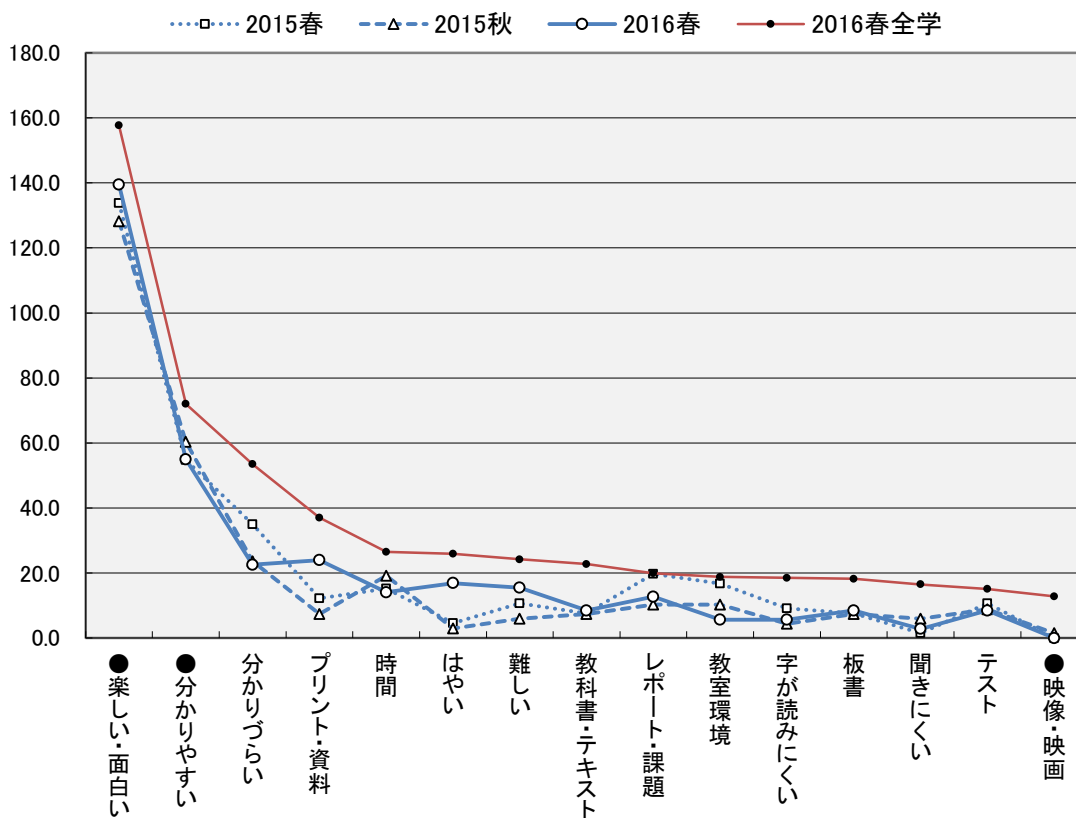


《4～9人》

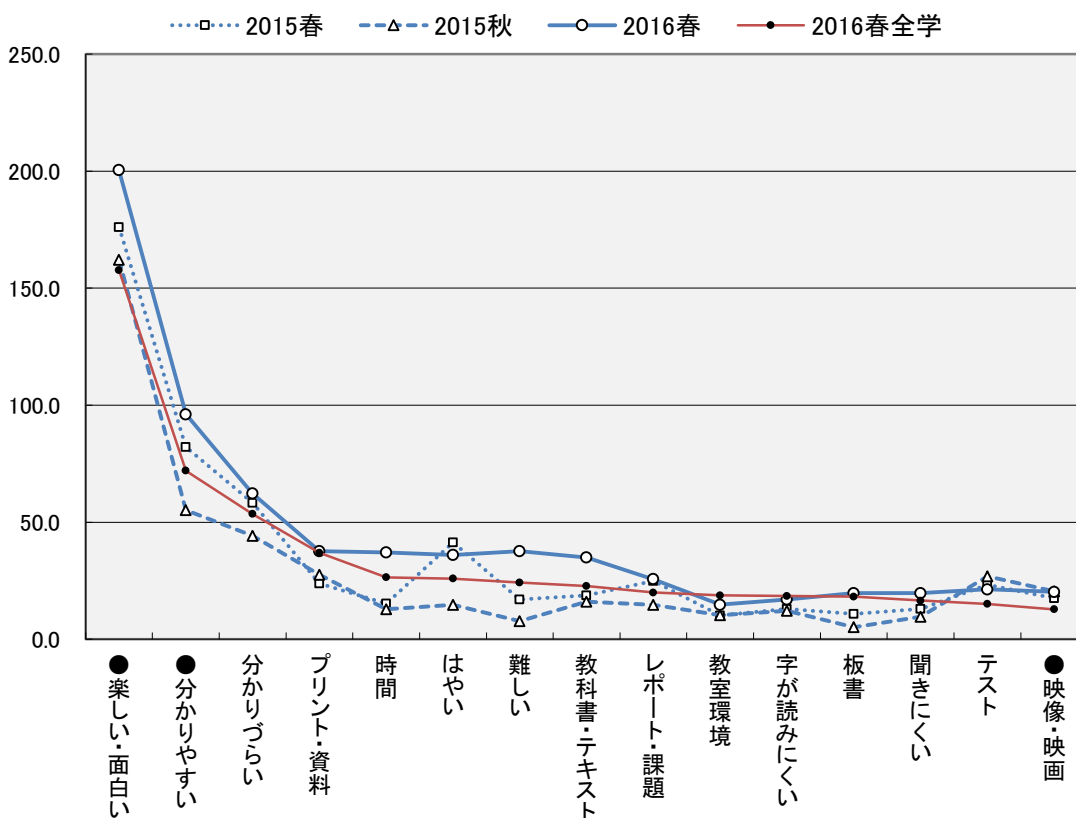


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】回答人数帯別

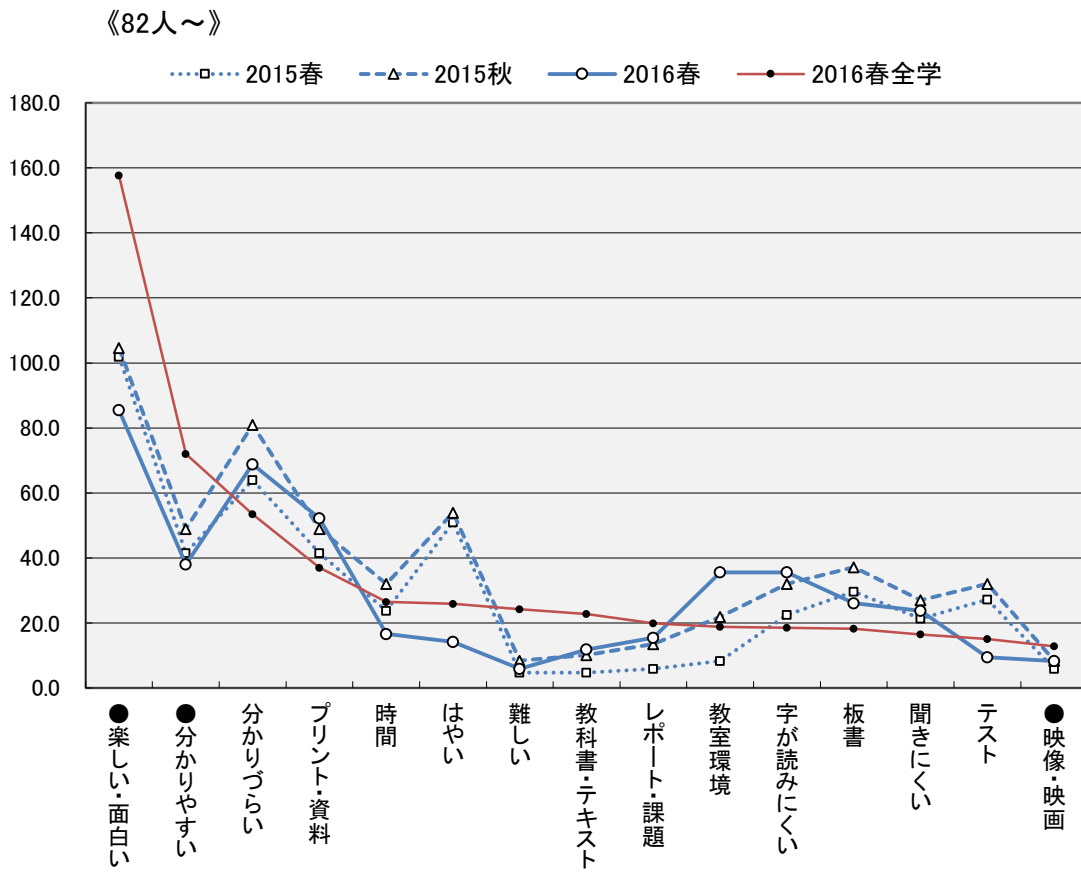
《10～27人》



《28～81人》

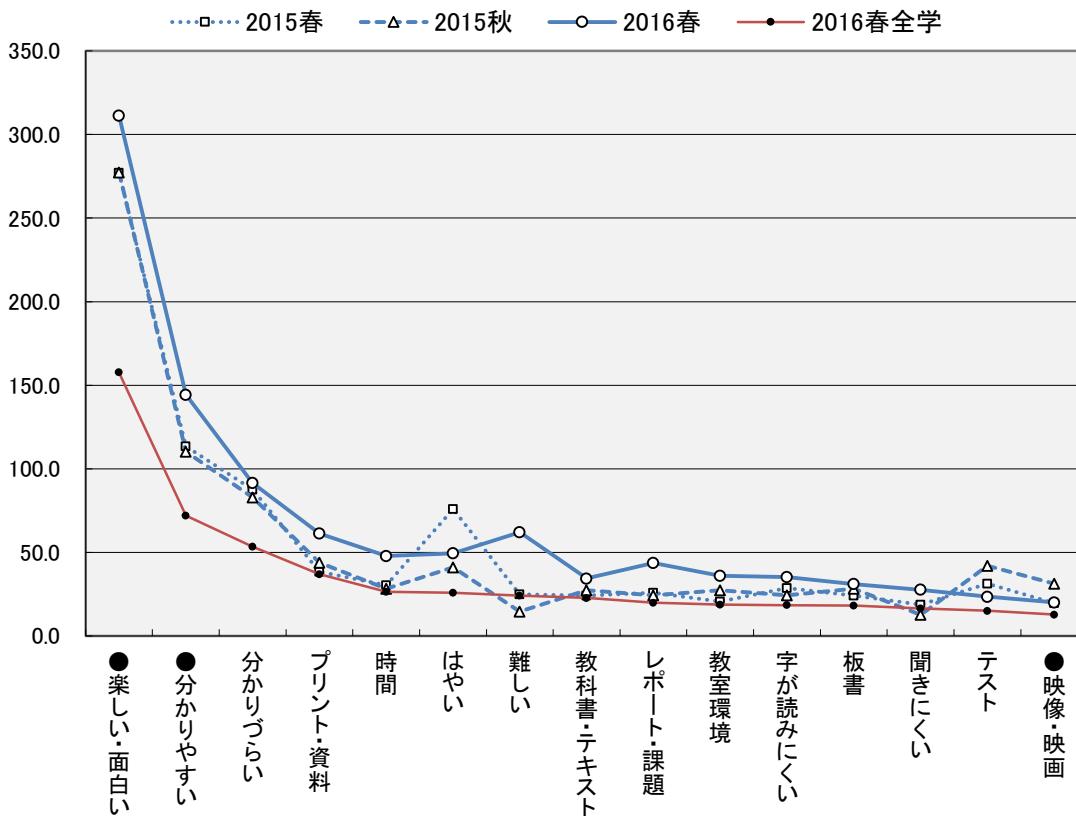


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】回答人数帯別

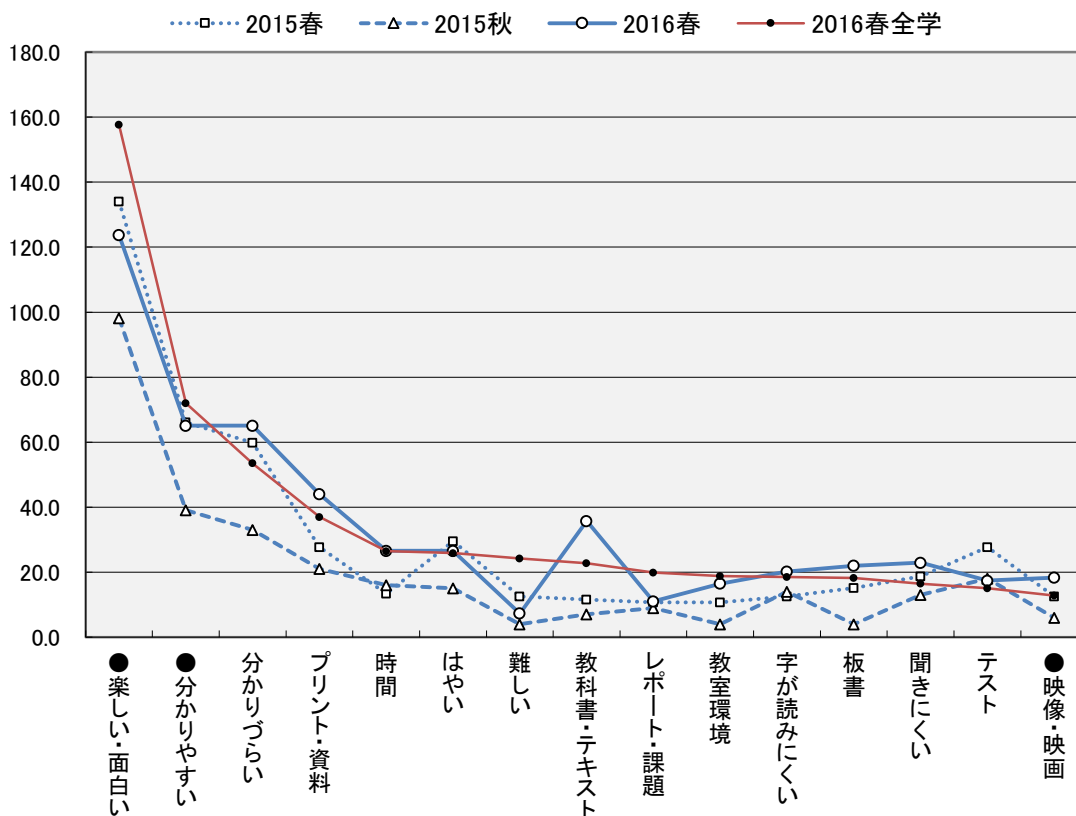


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】学年別

《1年》

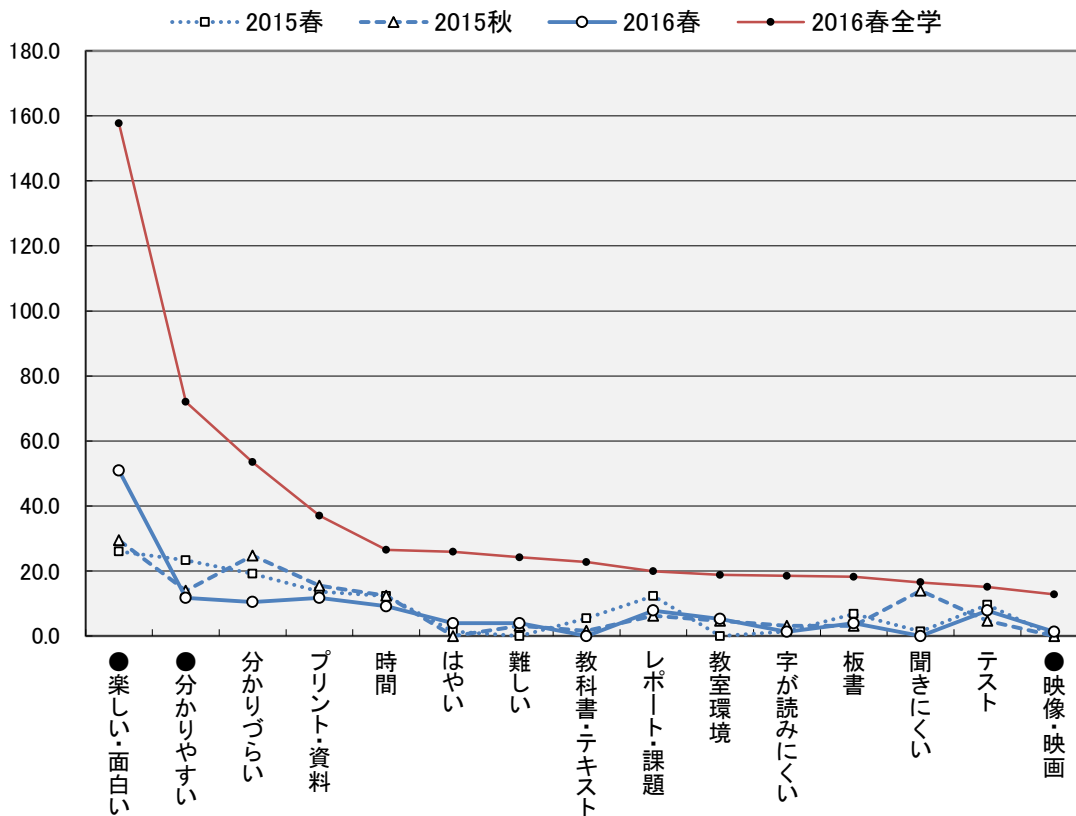


《2年》

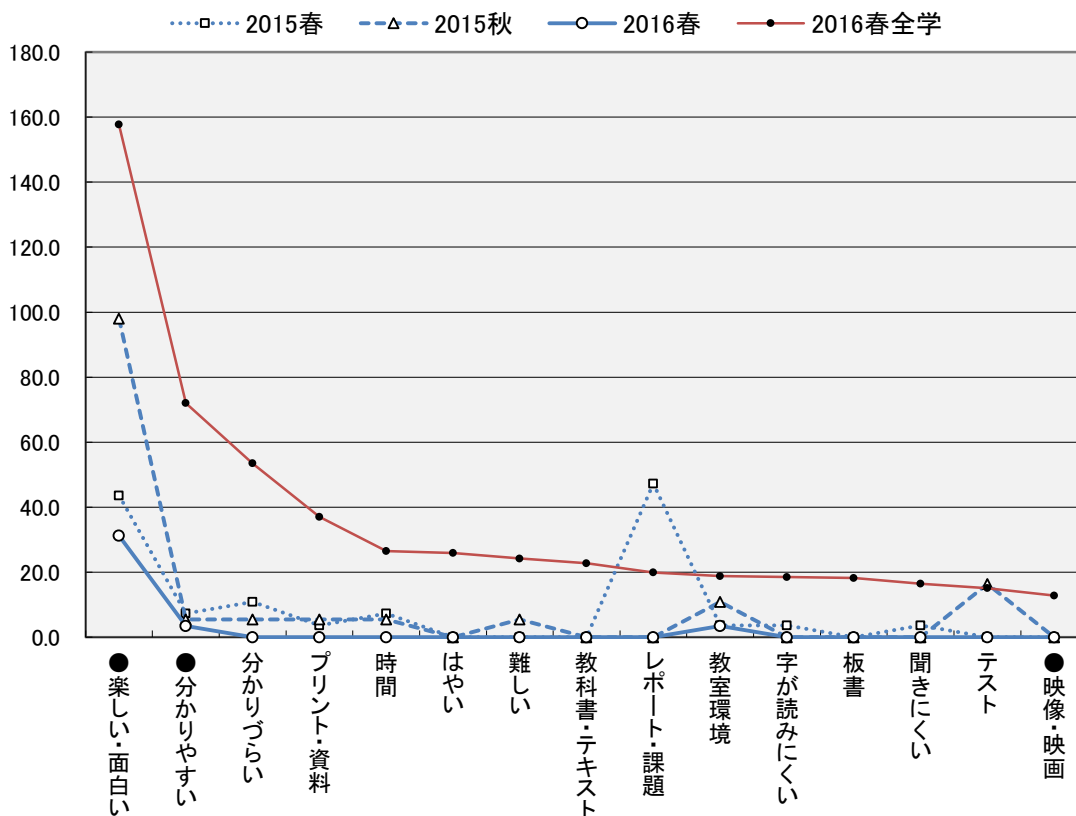


自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》



自由記述回答 頻出キーワード
【出現率前回比較】 学年別

